九州大学経済学部 同窓会報 第46号

九州大学経済学部同窓会
事務局　〒812－8581
福岡市東区箱崎６－19－１
九州大学経済学部内
TEL&FAX092－642－2442
mail to:dosokai@en.kyushu-u.ac.jp
郵便振替　01750－6－21743

目　次　Contents

平成21年度行事予定（総会のご案内）／１
研究院長より挨拶　川波　洋一（昭和34年卒）／２
新事務局長挨拶　久野　国夫（昭和52年博士入）／３
支部だより
東京支部　事務局長　吉元　利行（昭和53年卒）／４
関西支部　事務局長　中野　光男（昭和50年卒）／５
福岡支部　事務局長　平井　彰（昭和55年卒）／６
植山隆幸氏追悼文　犬山　俊昭（昭和40年卒）／７
講話
もっと博多を知ろう――博多津要録を巡って
秀村　選三 九州大学名誉教授（昭和22年卒）／７
リレー随想
「思えば今も涙抑え難し―旧師旧友の格別の恩義―」
田中愼一郎（昭和32年卒）／11
「秀村ゼミ　半世紀の交流」　有吉　孝一（昭和34年卒）／12
「往時を思い出すままに」　箱島　信一（昭和37年卒）／14
「おじさん大学生の記」　長田　武郎（昭和42年卒）／16
「木下悦二先生『世界経済論七〇年』に思う」
田中　素香（昭和44年卒・昭和46年博士入）／17
「秀村ゼミ多久合宿から三十五年」
中楯　潔（昭和50年卒）／18
「玄海の浪の華」　石田　光明（昭和51年卒）／20
「九大周辺、ある時代の断想」
川本　忠雄（昭和49年卒・昭和52年博士入）／21
「いま振り返る学生時代―都留先生やゼミのこと―」
安髙　優司（昭和57年卒）／22
「木下悦二先生に学んだ事」
大石　芳裕（昭和56年卒・昭和58年博士入）／24
「私の日本留学前後」
崔　東術（平成４年博士入・平成９年博士修了）／25
「九州大学時代の思い出～アジアと九州大学経済学部～」
片桐　昭司（平成４年博士入）／26
同窓生健筆模様
「自動車とリサイクル」
外川　健一（平成2年修士入・平成４年博士入）／27
人物往来～退官
「お別れのことば」
細江　守紀（昭和45年卒・昭和47年博士入）／29
同窓会奨学生より
「留学生活の苦楽」　田　崇賢／30
「日本留学の感想」　戴　建中／31
同窓会会則／32
同窓会役員名簿・歴代会長／34
同窓会費納入のお願い／36
訂正とお詫び／36

平成21年度行事予定（総会のご案内）

平成21年度の各支部総会を下記の通り開催いたします。皆様、お誘い合わせの上、多数ご参集下さいますようご案内いたします。

平成21年度福岡支部総会

日時　平成21年６月５日（金）18時～
場所　博多都ホテル
（福岡市博多区博多駅東２－１－１
TEL（092）441－3111）
<お問い合せ先>　福岡支部事務局　平井 彰
㈳九州経済連合会内　TEL 092-761-4261
E-mail　hirai@kyukeiren.or.jp

平成21年度全国・東京支部合同総会

日時　平成21年７月７日（火）18時～ 20時50分
場所　学士会館　210号室
（東京都千代田区神田錦町３－28
TEL（03）3292－5936）
<お問い合せ先>　東京支部事務局　吉元　利行
TEL　03－5877－5590（ダイヤルイン）
FAX　03－5877－5859
E-mail　Qdaidousotokyo@aol.com
cc：toshiyuki.yoshimoto@onet.orico.co.jp

平成21年度広島地区九大法・経同窓会総会

日時　平成21年11 ～ 12月開催予定
場所　未定

平成22年度関西支部総会

日時　平成22年２月６日（土）15時～
場所　阪急ターミナルスクエア17
（大阪市北区芝田１－１－４
阪急ターミナルビル17階
TEL（06）6373－5790）
<お問い合せ先>　関西支部事務局　中野　光男
富士精版印刷株式会社管理本部　気付
TEL　（06）6394－1182
E-mail　m-nakano@fujiseihan.co.jp

研究院長より挨拶

九州大学経済学部の現状と教育の国際化

経済学研究院長
川波　洋一

我が国の国立大学が独立行政法人化し、九州大学も国立大学法人九州大学となって６年目を迎えることとなりました。国立大学法人は、その業務運営実績について６年間の中期目標・中期計画を策定し、年度ごとの計画策定・実績報告を行うことになっていますが、今年はその第１期中期目標・中期計画期間の最終年度に当たります。国立大学が独立行政法人化したことによって生じた変化の一つは、評価の導入ということです。本会報43号では、そのことを大学あるいは大学の行う教育や研究が市場メカニズムにさらされることになったと表現いたしましたが、評価の結果が運営費交付金の高に反映されるという意味では、まさにそのような側面を持っているということができます。九州大学は、平成19年度に大学評価・学位授与機構による認証評価、平成20年度に業務実績に係る評価（いわゆる法人評価）をそれぞれ受審しました。経済学研究院・学府・学部もそれに応じて評価を受けた次第です。平成20年度には、産業マネジメント専攻（ビジネス・スクール）が、大学基準協会において専門職大学院認証評価を受審いたしました。このほか、外部評価や教員の業績評価も行われており、大学はまさに評価の荒波に揉まれているのが現状です。

そのようななか、九州大学は、評価に耐え、社会の負託にこたえるための態勢を築くべく様々な改革に取り組んでまいりました。経済学研究院においても、平成16年度から学部・大学院教育改革に取り組み、新カリキュラムの策定と運用に努めて参りました。カリキュラム改革の主眼は、学部については、基本科目の導入と演習重視、これにもとづくきめ細かな修学指導の実施に置きました。後者は、修学カルテ、ピア・アドバイス等の導入という形で実践している次第です。大学院の新カリキュラムは、「大学院基本科目」と「大学院専門科目」と「リサーチワークショップ」の三つの層からなりますが、とくに大学院基本科目の拡充に力を注いだ次第です。大学院基本科目について、経済工学専攻はマクロ経済学など大学院レベルの上級科目12単位中６単位の必修を課し、経済システム専攻は各分野の標準的な上級科目を設置した他､「基礎科目」として必修の「経済学方法論」を設置し、大学院での研究への取り組み方、リテラシーや研究倫理の修得を目指しています。

このほか、アドミッション・ポリシー、カリキュラム・ポリシー、ディプロマ・ポリシーの体系的展開の中核的手段として、魅力的で顔の見える教育プログラムを提供するとの観点から､履修パッケージ･履修プログラム制を導入いたしました。これによって、カリキュラムとその履修によって養成される人材がモデルとして外的に提示されるようになりました。さらに、この間、大学院入試制度改革を行って、入試科目・配点の整理、入試方法の見直しも実施いたしました。研究生制度改革を行い、研究生の受入に柔軟性を持たせるようにしたのもこの時期のことです。また、学部の優秀な学生のなかから大学院進学者を確保する仕掛けとして、「学部・学府一貫教育プログラム」の実施を開始（平成19年度）しました。このプログラムへの参加を認められた学生は、学部在学中（４年次）から大学院修士課程科目の履修が可能となり、大学院に進学後は学部時代の履修単位を既修得単位として認定し、努力すれば学部４年＋修士課程１年で、学士及び修士の学位を取得することも可能となるという仕組みが出来上がりました。

教育改革において取り組みが遅れていたものとして、教育面における国際化の推進があります。これについては、平成19年度から中国人民大学との間で共同教育プログラム（ダブルディグリー制度）の導入について協議を開始し、教育の国際連携の強化を図りました。

いま、文部科学省は、国の施策として留学生30万人計画を推進しています。これは、2020年までに留

学生数を30万人にまで増やし、併せて海外への留学生派遣を積極的に推進し、経済力や産業競争力の維持向上のために世界的人材獲得競争に対応しようとするものです。そのために、国際化拠点大学（グローバル30）の選抜、英語で提供される科目の履修だけで修了要件を満たすことを可能にする英語授業のシステム化や外国人留学生の国内企業への就職支援、国内日本語教育の充実等々といった施策が打ち出されています。こうした施策の背景には、世界的な人材獲得競争によって東アジア地域から優秀な研究者・技術者が米国に流出している現在、これらの人材を東アジア域内に還流させ、同地域の国際競争力を高めるために人材面からサポートしようとの意識もあると思われます。

確かに、近年、東アジア諸国特に中国の経済成長並びに日本との経済関係の緊密化により、日中における貿易取引、人的交流、情報交換が飛躍的に拡大しており、東アジアを中心とする経済事情に通じた高度な専門能力・コミュニケーション能力を備えた人材が、企業、自治体において求められていると言えます。それにもかかわらず、現状において、アジアの優秀な人材を惹きつけてやまない欧米の高等教育モデルに対抗して、日本、韓国、中国をはじめとする東アジア諸国は、それに対抗しうる優れた高等教育モデルを提示しえているとは言えない現状にあります。もし、日本をスル―して欧米に向かう東アジアの留学生を東アジア域内で教育する国際高等教育連携プログラムがあれば彼等を域内にとどめることも可能だと思われます。その眼目は、専門的能力、語学力、コミュニケーション能力、人的コネクション等、多様な付加価値を持ち、国際舞台で活動できる人材を育成することです。このようなプログラムにおいては、学生は所定の一連の課程を修めることで複数の学位を取得し、加えて、異なる文化圏で高等教育を受けることで、専門的能力のほか、多様な付加価値を身に付け、国際舞台で活動することができるようになると思われます。

日本の大学は、東アジアの大学・研究機関間ネットワークの拠点を形成することによって、大学の知的基盤、教育基盤としての機能を一層拡充し、欧米の大学に流出しがちな東アジア諸国学生を域内において教育する東アジア版国際高等教育プログラムの構築を目指す必要があります。我が学部も、このような教育の国際的ネットワークを構築するための努力を続けていきたいと考えています。

新事務局長挨拶

平成21（2009）年度入学式　新入生335名
平成20（2008）年度卒業式　卒業生326名

丑山事務局長おつかれさまでした。

同窓会事務局長
久野　国夫

平成21年４月７日、福岡国際センターで平成21（2009）年度入学式、終了後箱崎キャンパスで経済学部オリエンテーションが開催されました。なおビジネススクールの入学式は、それに先立って４月４日に開催されました。入学者総数は335名で、内訳は経済学部経済・経営学科が154名、経済工学科95名、大学院経済学府修士学生が経済工学および経済システム専攻44名、産業マネジメント専攻（九大ビジネススクール、略称QBS）が42名です。経済学部オリエンテーションでは、新谷庸助福岡支部長および平井彰事務局長にお越しいただき、同窓会への入会案内を行っていただきました。

３月24日にはリーセントホテルで東京・関西・福岡の各支部役員や名誉教授の参加のもと、経済学部卒業生・経済学府修了生の卒業祝賀会が開催されました。経済学部卒業生は244名で、うち現代経済システムコース79名、国際ビジネスコース74名、経済

工学科91名です。経済学部のコース制は４年前のカリキュラム改革で平成20（2008）年度卒業生で終わり、本年度以降の卒業生は経済・経営学科と経済工学科となりコース別卒業生はなくなります。経済学府修士課程修了生は82名で、うち経済工学専攻17名、経済システム専攻25名、産業マネジメント専攻40名です。祝賀会では若手研究者への研究支援、学業優秀な学生への顕彰として贈られる「南信子」教育研究基金による「南信子」賞の授与も、川波洋一研究院長により行われました。以下が平成20年度の授与者です。

卒業論文・修士論文

⑴　経済・経営学科　相川　知之、馬場　冬彦
　　経済工学科　杉原　糸織
⑵　経済工学専攻　篠﨑　伸也
　　経済システム専攻　高橋　裕悠、伊藤　健司
　　産業システム専攻　黒木　正剛、梅本　歩

成績優秀者

⑴　経済・経営学科　相川　知之
⑵　ビジネススクール
　　小栗　康生、汐月　健太郎、加藤　雅子、
　　鎌田　幸治、黒木　正剛

最後に私事になりますが、本年度より丑山優同窓会事務局長の後任を、久野国夫が引き継ぎます。学部･学府での担当科目は｢産業技術｣､ビジネススクールの担当科目は「産業と技術」です。丑山優教授は平成17（2005）年に事務局長に就任、退職された平成18（2006）年以降も引き続き、名誉教授として事務局長の任を引き受けていただきました。同窓会事務局長という役員は「経済学部同窓会会則」にはありませんが、同窓会本部の運営上、大学側で不可欠の職務であり通常であれば現役教員がその任に当たるべきですが、丑山名誉教授のご厚意に甘え今日にいたるまで事務局長をお願いしてきたものです。丑山前事務局長は現同窓会池田会長へのバトンタッチをはじめ、会員増のための大学側との折衝など、同窓会のため大変なご尽力をいただきました。また本同窓会報の編集については、丑山前事務局長の前の事務局長である福留久大名誉教授にお世話になっております。平成16（2004）年度からの旧国立大学の独立行政法人化後、財務省・文部科学省は大学予算削減・教職員の定員削減を義務づけてきています。懸念されるのは彼らの発想のもとに、「大学は教育サービスであり学生はお客」という考え方があるのではないかという点です。私たちは教職員・学生を含め、大学は知の共同体であると考えており、学生を「一過性のお客様」とは思っておりません。丑山、福留名誉教授が退職後も同窓会活動にお手伝いいただいているのも、同じ思いを共有している仲間としての卒業生をはじめとする九州大学経済学部への愛情からだと思っています。経済学部同窓会には学生への奨学金や博士修了生へのケアなど、大変なお世話をいただいております。今後とも同じ思いで同窓会活動へのご協力を心からお願いして、事務局長就任へのあいさつといたします。

支部だより

東京支部

平成20年度下期の東京支部の活動状況を報告いたします。

１．理事会の活動状況

平成21年３月２日に理事会を池田支部長以下13名の理事の出席の下で開催し、７月７日（火）午後６時から開催する東京支部総会（本年度は、全国総会も開催）の開催内容、会費、企画内容を中心に検討しました。

恒例の記念講演については、本年度からの裁判員制度の導入があることから、最高裁判事の桜井龍子さん（法学部昭和44年卒業）にお願いすることとし、懇親会での出席者の交流方法についての検討などを行いました。

また、事務局を中心に若手理事会を３回開催し、昨年度の総会の運営の反省、本年度総会の企画内容などについて話し合いを持っており、理事会から付託された本年度総会の準備を進めております。

本年度の活動予定案、役員案、予算案などの決定

については、平成21年６月８日（月）午後７時から理事会を行い、決定する予定です。

本年度７月７日の総会・懇親会については、詳細な開催案内を同封しておりますので、そちらをご覧ください。また、東京支部ホームページのほうにも今後開催案内を行う予定です。

２．九大東京同窓会について

九州大学の各学部・学科の同窓会東京支部やサークル・クラブの同窓会で構成される東京同窓会における活動状況は以下の通りです。

平成21年１月15日午後６時から九大東京同窓会拡大理事会が開催され、賀詞交歓会の最終調整及び大学当局から100周年記念事業の募金の状況報告と協力の依頼がありました。１月22日（木）午後６時から学士会館で開催された九大東京同窓会総会・賀詞交歓会には、各学部から300名を超える参加があり、経済学部同窓生から46名の参加がありました。賀詞交歓会は、参加者多数のため、続きの２部屋を開放して、ビデオ中継しての開催となる盛況で、若手卒業生も多数参加があり、経営者、官僚、裁判官などとの積極的な交流が注目されました。

九大東京同窓会は、卒業生の旧交を温める場であるとともに、異業種交流的な役割も果たしており、今後も参加者が拡大していくものと思われます。

本年度も、8月21日（金）午後６時から学士会館にて、九大東京同窓会主催のビアパーティが開催されます。

３．経済学部・学府卒業祝賀会

平成21年３月24日開催の九州大学経済学部同窓会主催の経済学部・学府卒業祝賀会には、下川副支部長、杉副支部長、鍛治理事、吉元の４名が出席しました。同窓会活動の意義をＰＲするとともに、東京支部で行っております卒業生のメーリングリストの案内を行いました。

その他の活動と致しましては、平成20年11月20日に学士会館で開催された法学部東京同窓会、平成21年２月７日に開催された九大経済学部同窓会関西支部総会への出席などを行い、同窓会活動の状況について情報交換しました。

東京支部の活動状況は、http://homepage1.nifty.com/dousou/　のトップページwhat's newやその下の東京支部通信（ブログ）からも見ることができます。

【東京支部事務局長　吉元　利行 1978（昭和53）年卒】

関西支部

第34回支部総会が２月７日（土）午後３時より「阪急ターミナルスクエア17」（大阪・梅田の阪急17番街）にて、名誉教授５名をはじめ、大学、本部、東京支部、福岡支部、法学部などからも多数の来賓をお迎えし、約80名の参加を得て盛大に行われました。

第１部の支部総会は、石橋支部長（36年卒）が挨拶に立ち、「リーマンショックで世界的な不況の中にあるが、同窓生が元気にたくさん集ったので、楽しいひとときを過ごしてほしい。しかも、今日はアサヒビールの池田会長に忙しい中来て頂いて感謝している。後ほどの講演を楽しみにしている。」とのお話があり、その後、20年度会計報告・行事報告、21年度行事計画案が原案通り承認され、総会は滞りなく終了しました。続いて、大学の近況報告を久野教授から、本部事務局報告を丑山事務局長から説明を受けました。なお、大学の渡邉総務部長から六本松キャンパスの移転や九州大学創立百周年記念事業などについての説明がありました。

第２部の講演会では、アサヒビール㈱代表取締役会長の池田弘一氏（38年卒、九州大学経済学部同窓会会長・東京支部長）から、「ビールがもっとおいしくなる」という演題で、アサヒビールの歴史・事業・商品などの紹介のあと、ビールにまつわるエピソードや健康に関わる誤解と正しい知識など、早くビールが飲みたくなるような話しぶりで、おもしろおかしく聞かせて頂きました。

第３部の懇親会は、小森田副支部長（46年卒）の進行で始まり、ご来賓の紹介に続き、講師の池田会長による乾杯の後、懇談会に入り、和やかな雰囲気で盛り上がる中、佐野副支部長（38年卒）指揮で学生歌「松原に」を全員で斉唱した後、棚倉理事（27年卒）の万歳三唱で締め、午後６時にお開きとなりました。また、今後の予定として、見学会（７月11日、アサヒビール吹田工場見学）、ゴルフ会（９月12日、愛宕原ゴルフ倶楽部）、勉強会（11月７日、講師内田勝敏氏、22年卒・同志社大学名誉教授）などを計画していますので積極的な参加をお待ちしています。なお、来年の総会は２月６日（土）を予定しています。

【関西支部事務局長　中野　光男 1975（昭和50）年卒】

福岡支部

1．平成21年度行事予定（総会のご案内）

「平成21年度福岡支部総会」

日時　平成21年６月５日（金）18時～

場所　博多都ホテル（福岡市博多区博多駅東2-1-1 TEL（092）441-3111）

お問い合わせ先

福岡支部事務局長　平井　彰　（社）九州経済連合会内

TEL（092）761-4261　E-mail hirai@kyukeiren.or.jp

2．支部だより

「新支部長に貫正義氏を内定～６月５日の支部総会で正式決定予定～評議員会を開催」

福岡支部では、４月15日（水）、福岡市・九経連会議室において評議員会（旧理事会）を開催し、新支部長に貫正義氏（昭和43年卒、九州電力株式会社取締役常務執行役員）を内定した。当日は進谷支部長をはじめ18名が出席し、①平成20年度事業報告・決算報告、②平成21年度事業計画（案）・収支予算（案）、③役員改選（案）の各議案について、いずれも原案通り承認された。

①平成21年度事業報告は、以下の通り。

a 平成20年度全国・福岡支部合同総会　６月２日（月）18時より博多都ホテル

150名が出席。特別講演会として星野裕志・経済学研究院教授（産業マネジメント専攻長、国際経営・国際ロジステッィクス担当）より「QBS九州大学ビジネススクールについて」のご講演をいただいた。なお、総会実行委員会を５月９日（金）、福岡市・じゃんくうにて開催し、正副支部長、運営委員等９名が参加。

b 評議員会　20年度の評議員会は４月11日（金）、福岡市・九経連会議室にて開催し、19名が出席。

c サロン会　忘年会を含め６回開催。会場は忘年会を除きいずれも福岡市・九経連会議室にて開催。４月18日（金）「九州大学大学院ビジネススクールについて」卓話は星野裕志氏（前掲載）、11名出席。８月８日（金）「日本の歴史は福岡から始まった」五十二万石本舗如水庵社長・森恍次郎氏（昭和45年卒）、18名。11月14日（金）「もっと博多を知ろう～『博多津要録』のことなど」九州大学名誉教授・秀村選三氏（22年卒）、14名。12月５日（金）「忘年会」会場は酒房「やす」、14名。１月23日（金）「九州大学および経済学研究院の現状」九州大学大学院経済学研究院長・川波洋一氏（51年卒）、11名。２月20日（金）「韓国における歴史紛争」九州大学韓国研究センター客員教授・ソウル大学経済学部教授・李栄薫氏、12名。

d 交流ゴルフ会　第44回６月４日（水）、筑紫丘ゴルフクラブ、８名参加。第45回11月８日（土）、北山カントリークラブ、10名参加。

②平成21年度の事業計画案としては、以下の通り。

a 平成21年度支部総会　６月５日（金）18時より福岡市・博多都ホテルにて。なお、総会実行委員会を５月15日（金）、忘年会会場の酒房やすで開催。

b サロン会は原則として毎月１回、第１金曜日に開催。

c 交流ゴルフ会は半期に1回開催。第46回は６月13日（土）、筑紫丘ゴルフクラブにて開催。

d 若手交流会　８月の予定。

③役員改選案

進谷庸助現支部長は平成15年６月６日の平成15年度支部総会にて支部長に就任され、２期６年務められたが、評議員会で貫正義氏が新支部長に内定し、６月５日の支部総会で正式に就任予定。なお、貫氏は同窓会副会長、進谷氏は同窓会顧問に就任予定。また、井上喜三郎氏（23年卒）、滝口凡夫氏（26年卒）、富澤義敬氏（30年卒）より、それぞれ評議員退任の申し出があり、これらを踏まえて巻末のような役員体制となることを確認した。

以上①、②、③の各議案は、いずれも６月５日の支部総会で正式に承認を得ることとしている。

【福岡支部事務局長　平井　彰　1980（昭和55）年卒】

元東京支部長 植山隆幸氏を偲んで

同窓会評議員
犬山　俊昭氏
1965(昭和40)年卒

同窓会東京支部の創立に尽力され、第二代支部長を務められました植山隆幸氏が、昨年２月11日に逝去されました。87歳でした。ここに謹んで哀悼の意を表し、追悼の文を奉じます。

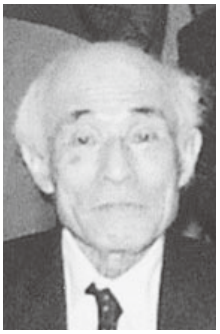
植山氏は、大分県中津市出身で、昭和18年九州帝国大学法文学部をご卒業、福岡銀行を経て34年日本オイルシール工業（株）（現、NOK（株））入社、38年取締役、52年に社長に就任されました。また、56年11月には、自動車部品工業界における活躍が認められ藍綬褒賞を受賞されました。

氏は53年、当時の田中定会長をはじめ教官の方々からの「関西支部に続いて東京にも支部を」との要請を受けられ「東京支部設立準備委員会」を設置、その委員長に就任され、何回かの委員会を経て同年12月１日、支部長に故倉田興人氏（４年卒）、副支部長に故伊藤三男氏（17年卒）・故竹中尚文氏（20年卒）、事務局長に同氏という体制で東京支部が発足し、57年に第二代支部長に就任、そして61年に本田精一氏（25年卒）にバトンタッチされるまで通して８年間、東京支部発展充実のための基盤作りに大いに力を致されました。さらにまた、59年には「法学部経済学部創立60周年記念事業後援会」の経済学部東京地区常務理事の任に就かれ、「国際学術交流振興基金」の、その目標を上回る募金活動に多大なご尽力をされました。ここに改めてそのご尽力に深甚なる謝意を捧げる次第です。

東京支部創立からもう30年が経ちました。往時茫々ですが、嬉しいことに支部のHPに東京支部設立総会時の資料が掲示されていました。その折りのことを少し。総会は、当時の田中会長や、都留先生、中楯先生、また高橋正雄先生など多数の先生方の出席も得て、有楽町の東京会館で開催され、総合司会を尊田耕吉氏（28年卒）が、続く懇親会の司会を隈正之輔氏（33年卒）が努められて、滞りなく発足の運びとなりました。元応援団部員のリードによる「松原に」の斉唱等に加え、その時にはもう一つ、当時のタイ国駐日大使のパヨン・シュティクル氏（19年卒）のおはからいによる優雅であでやかなタイ式舞踊が花を添えました。こうして植山設立準備委員長はじめ関係各氏の方々のご努力が実を結びました。

温厚で誠実なお人柄でした。温かいお心をお持ちの紳士であられました。いま手元に、ご遺族にいただいた故植山隆幸氏手ずからの絵を入れた絵葉書を見て、氏のありし日の数々偲んでおります。

もっと博多を知ろう――博多津要録を巡って



講演者・九州大学名誉教授
秀村　選三先生
1947(昭和22)年卒

九州大学経済学部同窓会、福岡支部サロン会は、平成19年11月14日、福岡市中央区天神１丁目「社団法人　九州経済連合会」内（幹事・平井）で開かれました。

本日は、九州大学名誉教授・秀村選三先生にご出席を頂き「もっと博多を知ろう～“博多津要録”」と題して講話をお願いしました。普段は30分間の予定ですが、本日は、時間を40分間に延長させていただき、秀村先生のお話をゆっくりお聞きしたいと思います。では、秀村先生よろしくお願いいたします。

博多津要録は寛文六年（1666）～宝暦九年（1759）の約一世紀間の博多の史料を編集したもので、全国的にも都市の史料集としては大変すぐれたものです。

博多の櫛田神社に所蔵されています。もとは二十八冊だったのですが、今は巻一を欠いて二十七冊になっています。これを1974年から78年に藤本隆士・武野要子・松下志朗・東定宣昌氏とともに校註しました。この方々のほかにも多くの方々に助けられて各巻約六百頁の三巻として刊行したものです。校註にあたっては文字の一字、句読点の一つまで厳密に検討し、議論し、激しい討論になることも屢々で、みな真剣に取り組みました。私たちのグループの史料集編纂の基本はこのときにほぼ出来上がったように思っています。

この博多津要録は博多の社会経済、町のあり方、町人の格式や町役人、祭礼、芸能、風俗、災害、多くの事件、諸種の犯罪、八幡（ばはん）といわれた密貿易、藩の町方支配、黒田家のことなど、博多を多面的に知ることができます。しかも博多だけでなく福岡の町、また宰府（大宰府）や宿場や村々のこと、日田・田代・久留米などのことも出てくるし、広く江戸、大坂、京都、長崎はじめ全国各地との多くの関連も窺えるのです。

博多の町では博多独特の町割りの流や町の年行司や年寄等々の町役人、多くの問屋や商業取引、それぞれの店に課せられる運上（営業税）や町々から切り立てられる切銭なども窺えるし、博多の町の内町と外町、外町にある外側門や番人など、或いは陸上交通の駄賃馬とその次所、海上交通の船、船持、水夫、町の家主や借屋、裏借屋、軽き者、日用取りなどの人々、とにかく町全般について実に多くのことを知り得るのです。

商業取引や問屋とか店、商人、職人などが多く出てくるのは当然ですが、たとえば博多織職屋の仲間が十二人の特権的ギルドであったことも分かります。博多の商人が京都や大坂の商人から資金を融通してもらいながら返済が遅遅として埒が明かないので貸主が幕府の要職八人或は十人から判を貰って（八判・十判という）博多に来てその返済をせまり、解決に苦慮している状況なども窺えるのです。

町の行事も多く、山笠や今日のドンタクの起源である正月の松囃子についても録されています。松囃子の時は福岡の町まで入込み、御館まで行き、無礼も大目に見られたため、福岡の町方の者と喧嘩になったりもしました。社会全般いろいろなことが知り得て面白いのです。

博多の町割はは流、古くは七流、後に九流（幕末には十流）に属する町々ですが、ほかに遊女町の柳町と寺中町（芸能者の町）があり、周辺の被差別部落も窺えるのです。時々差別問題で紛糾することもあったりして部落解放運動史の上でも取り上げてきました。他の文書では見ることのできないものも多く、たとえば柳町（石堂川の入り口西にあった）の遊郭の遊女を連れ出し、逃亡させていたのを追捕して連れ帰り、本人はじめ町役人や遊女の抱え主ほか多くの者が処罰された事件とか、あくまで伝説ですが、博多の遊女町の起源について柳町から藩へ出した書付には、昔冷泉津唐船入口の須崎浜近所に遊女町が立てられたこと、博多小女郎と言う美女が唐船の大将を生け捕りにし、その子が会いに来た話があったりします。或いは八幡（ばはん　密貿易）のお尋ね者四十六人の人相書きが江戸から来て詮議していますが、出歯ノ七兵衛事徳左衛門・筑前喜三郎事喜左衛門というように、すべての者が変名を持っているのも面白いですね。或いは雨乞いのため箱崎宮で相撲取りを福岡・博多両市中から五十人出して相撲興行があったとか見えています。

ところで博多津要録の索引を作るのは、以前同書の最終巻の末尾に索引を出すつもりと書いていまして、私も年老いたので約束をはたさねばという気持ちで、市民向けの古文書講座で長い交わりをもった方々に呼びかけ、津要録の索引を作ろうということになりました。市民のボランティアの方々には博多津要録を始めから丹念に読むのですから、博多の歴史を学ばれる良い機会にもなると思ったのです。私とともに数人の方が熱心に数年かけて一応事項・地名・人名・寺社名を採録され、さらにその結果で草稿を作ったのですが、私はこれを点検して大いに反省させられました。採録されている項目が地名・人名・寺社名については、ほぼ良いのですが、事項の採録が自然と私の専門の経済史中心になっていて、博多のさらに広い世界、多面的な事象が相当脱落しているように思えたからです。

一緒に採録してきた市民ボランティアの方々は大体出来上がったと思われていたようですが、点検してみると、幅の広い多くの要望には応じきれないことがよく分りました。この時初めて史料集の索引と普通の著書の索引とは違うという問題にぶつかったのです。それまで索引そのものについてあまり深く考えず、数人の方々とただ項目を拾って、調整しながらコンピューターで処理すれば何とかなるだろう、とにかくやっている間に方法論も確立するだろう位に比較的呑気に考えていました。以前に自分の著書の索引の経験もあり、津要録の校訂には研究者仲間の人たちと徹底的に討論して作り上げたのだか

ら、よく読みこなしているという自負心もあって思い上っていたことを反省しました。

著書の索引ならば、その本の主題にそって事項を採録すればよいし、多少関連する事項を拾っても限度があります。しかし史料集の場合は、利用者がどういう視角から引くのか、まったく多種多様で、その史料集の取り上げている時代、とりあげている事件、問題関心によって大きな広がりをもってくるのです。津要録の場合、常に博多の町が主題ですが、そこで起きたあらゆる事件、いろんな問題、生活があるわけで、関連することは社会全般、日本全体に及ぶのです。著書の索引と違ってあらゆることに関心をもって採録しなければならなかったのに気づきました。それでこれまで出されている史料集の索引の例を探しましたが、その事例はきわめて少なく、また博多津要録に直接参考になるものはなかなかないので、自分で津要録にむいたものを考えなければならないと思うようになりました。

そして、とにかく自分の専門の関心だけの、経済史研究のための索引でなく、いろんな分野、多くの方々の要望に応じ得るように事項の項目を相当に増やさねばならないことがわかりました。それだけでなく、折角の博多の優れた史料の索引だから、市民の多くの方々、ことに博多の人々に自分の町の町名や親しみのある屋号の店、人名、お寺、お宮は勿論のこと、もっといろんな事項も見て欲しい。いろんな項目を眺めていれば何となく引いてみよう、本文に何が書いてあるか見てみようかという気になってもらえれば幸いだと思うようになりました。本文がすべて活字印刷になっているのですから少し辛抱して読んでもらえれば、案外読めるし、意味の分らない言葉は辞書を引けば分かるので、わが町では昔こんなことがあった、あんなことがあったということは、町の歴史だけでなく、今の時代にも通じる人間社会のありかたについても深く考えさせられるものですから、是非市民に、ことに博多の人々が索引の字面を眺めて、言わば「眺める索引」として興味あるものをあれこれと引いてもらえたらと思うようになったわけです。

索引の作成には当然コンピューターを活用しなければなりませんが、最近は、本文の必要な文言に線を引いて、あとはアルバイトの人に渡してコンピューターで処理してもらえばよいとか、本文全文をコンピューターに打ち込めば、すべての文言はただちに出るではないかと言われますが、私のようなアナログ人間には何となくもの足りません。確かに打ち込んだ文言は直ちに出てきて所在は明確なのですが、その文言には当然考慮しなければならない他の文言、直接に関連して知っておくのがよい文言があるし、史料集の索引であればそのことは重要ではないか、関連と言えば何処まで関連するか分かりませんが最小限直接関連するものについて指示しておくのがよいように思うのです。それには本文をしっかり読み込まなければなりませんが、それだけに史料集の索引として意味があるのではないか、勿論どれだけ読み込めるか分かりませんが、折角する以上はデジタル人間とアナログ人間を結びつけの試みをしてみたいと思っています。

それで一応出来上がった素稿を点検して採録の項目、とくに事項が少ないことを仲間の方々に申し上げて補充に取り掛かったわけです。もちろん私の最初の作戦の重大な誤りはまことに申し訳なく、私の不明を謝りましたが、はじめは、これまで相当頑張ったのに、まだやらねばなりませんかとウンザリした顔をされましたが、私は心を鬼にして「百里の道を行くは九十九里をもって半ばとす」という古語を引いて、とにかくやらねば今までの仕事が全く中途半端なものになる、ここは何とか再度挑戦してほしいとお願いしまして、目下増補をねばり強くやっています。私としては急ぐことはない、ねばり強く確実な仕事をすることだと思っています。もっとも先生はいつまで生きているつもりですかと冷やかされていますが・・。そして現在は項目を増補するとともに何よりも関連する項目、それは最小限参照したがよい項目に限られますが、そういう項目を参照項目として挙げるために津要録本文の読み込みをしております。

もっとも参照の項目は専門研究者や長年博多の地域史を学んでいる方に対してというよりは、むしろ博多を初めて学ぼうとしている人、ことに博多の一般市民が身近かな博多を知りたいという時に多少とも立体的にものが見れるように、お手伝いが少しでも出来たらという気持ちで、専門研究者相手のあまり難しいことは考えていません。

たとえば、山笠では櫛田宮や承天寺、流、当番町、能など挙げるとか、問屋のような商業の上で重要な項目だと参照すべきものは相当多岐に渡るでしょうが、五十音で項目を挙げていますから問屋口銭・問屋商人のような同じ「とい」に出るものは、問屋の周辺を注意するように指示し、むしろ「と」の項目には出ない鰯町問屋・古渓町問屋・小問屋・大問屋・薬種問屋等々を特記してみようかと思っていま

す。重要と思われるものは何処まで採るか、今後の大きな課題ですが、特に重要と思うもは多少関連項目は多くするにしても、一般的には三つ、多くても五つ位かなと思っています。個人的な主観が大いに作用しそうですから出来るだけ多くの方々の意見をお聞きしたいと思っています。

それにしても博多津要録が博多の人にあまり読んでもらえなかったのは、私たちが博多津要録をあまりにも専門研究の史料としてのみ考えていた、もっと広く博多の市民に読んでもらえるように紹介し、お誘いすべきだったという反省もあり、一つの試みをしたいのです。私が若ければ、市民と共に「博多津要録を読む会」を始めたい気さえしています。とにかく博多をもう一度昔々から見直してほしいのです。博多は幸に石城志とか石城遺聞等々多くの史料が翻刻刊行されています。現在私が市民グループとともに読んでいる、かつて三宅酒壺洞さん所蔵の「博多年代記」もようやく終わりそうですので、これらを読み合わせると大変面白く勉強できそうです。

そして歴史が古い、昔から潤いある、情緒豊かであった町・博多をさらに文化の薫り高い二十一世紀の都市にするよう市民全体でもっと考えてもらえるようにしたいのです。

以前に文化勲章を受けられた竹内理三先生が九大教授の時代に、福岡市のことを「祭りには数千万金が惜しげもなく投ぜられるが、歴史を愛し文化を語る者の住み着きがたい町」と評せられたことがありましたが（竹内理三編『対談日本古代史』三百五十一頁）、私は福岡生まれ、福岡育ちの人間として恥ずかしく残念に思ったことがあります。奈良や京都よりずっと古い那の国、那の津からの歴史をもち、古代・中世にはアジアの重要な港津としてわが国の政治経済・文化の発展に寄与した町であり、近世は長崎にその役割を譲ったにしろ古い伝統を残しながら独自な町として発展した情緒豊かな潤いある町の歴史・風俗を市民に是非知っていただき、明日の都市造りの発想を豊かにしてほしいのです。

この博多津要録は数年前に刊行された『福岡県史・通史篇・福岡藩（二）』の「第六編　近世中期の福岡・博多町方社会の展開」の中によく利用されています。勿論概説書ですから専門的に深くはないですが、適切に述べられており、また博多に関する史料は他にも数多くあるので、それらも良く利用されているので、読んでください。これより前の時代の博多は同じ県史の『通史篇・福岡藩（一）』を読んで下さい。

残念ながら近世後期の博多については、県史の編纂が県の都合で全く一方的に打ち切られたままで、福岡藩に限らず、県史の各分野中途半端のまま中絶、いびつなまま、未完のままで、そのぶざまさを県としては恥ずかしくも思われないらしいです。県は今後県史の編纂をどう考えておられるのか、全く分かりません。県史編纂は本格的なものでないとしないと私は何度もお断りし、西欧や東京都とか他の幾つかの県史のように恒久的に継続するという約束で覚悟して県史を始め、多くの研究者、県民がそのために精力を注ぎ、しかも県自体は多くの資料を散逸させ廃棄してしまっている惨憺たる状況の中で資料調査・保存を続け、廿数年間執筆、編纂して六十六巻を刊行し、さらに戦争で言えば前線は広く展開している途中で何の相談・検討もなく、一方的に打ち切ったのに私は全く腹を据えかねています。今は残務整理に近いことをやりながら、私たちは県の態度如何にかかわらず、県民のため、この地域のため、営々として努力した無名の先人のため、意地でこの地域の歴史の編纂を続けるつもりです。この博多津要録の索引も県史編纂の継続を素手でやっていると言ってもよいかと思います。

福岡県は県史に限らず文化政策に確乎たる戦略を持っているのでしょうか。行き当たりばったり、すべて中途半端です。最前線の現場をよく見て判断されていないのではありませんか。県のトップの方々は県史に限らず文化政策について、真剣な意見を聞こうとされない。こちらが会おうとしてもむこうは会おうともされない。かつて最前線の状況もよく知らず、取り巻きの参謀の不確実な安易な情報・意見を鵜呑みして、とんでもない作戦命令を出して莫大な人命・物資・財産を全く無駄に消耗して惨憺たる敗戦を招いた指導者たちがいました。あの人々に似たようなことをなさらないようにと願っている戦中派の一人です。こうした批判はまったく申し上げたくありませんし、自分自身が嫌になります。おとなしく社会を見守っているのが此の国の老人のたしなみとされていますが、私はA．トインビーが「老人はとかく懐古趣味に浸るが、むしろ死後の社会のために発言することは良いことだ」と云っているのに励まされて、あえて言わせていただきました。

以上、索引つくりの雑駁なお話をして、すみませんでした。ことに県史については或いはお聞き苦しい点もありましたでしょうが、どうかお許し下さい。

リレー随想

思えば今も涙抑え難し
―旧師旧友の格別の恩義―

北九州市立大学元学長
田中　慎一郎氏
1957(昭和32)年卒
1959(昭和34)年博士入

久留米の第二分校文科から経済学部に進学したのは、1953（昭和28）年４月。法文ビルの西隣の一画は、まだ帝大前町と呼ばれ、九大前に向かう市内電車の行き先表示も帝大前。当時は朝鮮戦争さなか、法文ビルすれすれに、北を目指して飛んで行く米軍ジェット戦闘機のけたたましい爆音で、しばしば授業は中断された。その所為でという訳ではないが、私は間もなく肺結核が悪化、市内の病院に担ぎ込まれ休学した。

通算５年も患ってきた肺結核も癒えて、２年後の４月に復学。私自身参加してきた反戦平和の学生運動も一段落、キャンパスは２年前と違って落ち着いていた。復学後も他学部には学科があるのに、当時の経済学部には学科が一つもなかった。必修科目や選択科目の縛りもなく、あるのは自由科目だけ。つまりどの科目も一品料理を選ぶように、自由に選べた。これも経済学部だけではなかったかと思う。

私なんかそんな自由を良いことに、ノート筆記された吉村正晴先生の「世界経済論」と湯村武人先生の「西洋経済史」以外の講義は、ほとんどサボってばかり。顔を出すのは法文ビルの半地下にあった経済研究会のサークル部屋や学生自治会室。そんなズボラでも、ちゃんと単位が取れた。甘い先生方が多かったから、と言うよりも、助け舟の虎の巻があったからだ。試験前になると、まじめに出席した学生が、法文ビルの半地下で、ガリ版刷りの講義ノートを作って売っていた。

たまさか向坂先生の原論の講義に出席したときのことは、今でもはっきり覚えている。テキストは資本論。テキストを読んだあと、誰かが質問した。お前答えろと名指しされたので、恐る恐る答えたら「そんな持って回った言い方をするな、もっと素直に読め！」と一喝された。恐れをなして学部のゼミは敬遠。大学院の時には、おっちょこちょいな私を心配されてか、「目をつぶって清水寺の舞台から飛び降りるようなことはするな」と諭された。後になるほど思い出はいっぱいあるが、今は一つだけ。われわれ教え子と外食されるときには、楽しいお話をされた。食事はいつも先生のおごりだった。

田中定先生と奥様

大先生のもう一人、高橋正雄先生は、統計学の答案に何を書いても優、だからサボってばかり。ゼミも取らなかった。研究会の終わりに学生とお茶を飲んだとき、先生はご自身の分を払われるだけ。しかし先生も学生思いは並みではなかった。その証に、学生に呼びかけて工場見学に連れて行かれたり、ゼミのテキストに経済白書を使われたりした。

欠席しなかったのは外書講読の仏経とゼミ。仏経の先生は、進学したときには副田満輝先生、復学してからは湯村先生。どちらも少人数のゼミみたいで楽しかった。フランス語で思い出した。分校時代、第一外国語のフランス語の文法の時間、城野節子先生、フランス語の例文（日本語では「彼は生まれた」）を、けろっとして読まれたが、７人のわれわれはぷっと吹き出して後を続けるのに苦労した。

私が取ったゼミの先生は、田中定、都留大治郎、吉村正晴、近江谷左馬之介の４先生。吉村先生は確か出版されたばかりの先生の『自由化と日本経済』、ゼミコンもなさらないまじめな先生だった。田中先生はゼミでは論議の交通整理をされる程度。ゼミコンは東中洲河畔にあったサッポロビールのビヤホール２階。参加された奥様もみんなと一緒に大きく口を開けて歌われた。今でも悪いことをしたと反省しているが、先生の行きつけの飲み屋で、「息子」と騙って飲み代を先生の付けにしたことがある。それでも失明しそうになった時には、ゲルピンの家庭の私を心配されて、九大病院の生井眼科教授に頼み込まれ、

〈しゃがんでいる人〉前列　右から　下川氏　近江谷先生　奥様
〈中腰の人〉永松氏
〈立っている人〉右から　筆者田中氏　逢坂氏
2人とばして5番目　後藤氏

無料で治療できるように取り計らって下さった。

田中先生の自由放牧的なゼミのやり方は、弟子の農業政策特講担当の都留先生も踏襲された。前号のこのコラムで隈正之輔君が紹介した所によれば、何とテキストは高木幸二郎先生のあの難解な恐慌論の本、選んだのは先生ではなかったはず。出身地はどこかと尋ねられるのが、先生の癖だった。飲めばもっと楽しかった都留先生だが、頭が恐慌論の後遺症かゼミコンの記憶がない。

新任早々の近江谷先生のゼミは、テキストが資本論第二巻。宇野理論を巡って論議した。太宰府の新婚ほやほやの借家に押しかけ、奥様手作りの料理でコンパし、みんなで気炎を上げた。上着の胸ポケットに万年筆をさしていたら、「君、そこはポケットチーフだけ入れるのだよ、それじゃ田舎の村会議員だね」と、注意していただいた。

二分校時代のことだから別の機会にと思ったが、あのときの先生方や学友たちには格別の恩義があるので、最後に一言記して謝意を表したい。1952（昭和27）５月30日夜、久留米で「破防法反対」の街頭デモ中、学生自治会委員長の私が「カメラ強奪」事件の犯人として、不当に逮捕され、裁判にかけられた。

前列 右から　相原陽氏　向坂逸郎先生　後列 右から　福田豊氏　筆者田中氏　田中勝之氏
昭和32年のゼミ生の数年後の集いのとき。福田氏と筆者を除いて、３名は物故者

幸い先生方と学友たちの寝食を忘れた救援活動のお蔭で、11ヵ月後には無実を晴らすことが出来た。この事件を取り上げた小島直記の『夜の顔』（1955年）は、先生方と学友たちの奮闘ぶりを克明に描写している。もしあの時に先生方や学友たちに助けてもらわなかったら、その後の私はなかった。裁判費用も、肺結核が悪化し久留米大学病院に入院した時も、すべて皆さんのカンパで賄われ、私は１銭も払っていない。学部進学後入院したときも、大学学生課か厚生課が市へ働きかけて、医療扶助を受けられるようにして下さった。先生や学友それに事務の方々に、私ほど面倒をかけた学生はいないだろう。

（2009年３月）

（編集部註：筆者の希望により、主題・副題ともに編集部で付けました。主題も副題も十文字に揃えたところが味噌かもしれません。）

リレー随想

秀村ゼミ　半世紀の交流

有吉　孝一氏
1959（昭和34）年卒

現在の経済学部ではゼミが必修ではないと聞いたが、私が在学した1950年代はゼミが必修であったし、いくつ履修してもいいというきわめて自由な時代であった。私は３年生から秀村選三先生の「日本経済史」、４年には岡橋保先生の「金融論」のゼミにも入った。当時、秀村ゼミは新しい試みが始まっていた時期であった。

「君達のクラスは私の演習がそれまで江戸時代やマックス・ヴェーバーをやっていたのから日本資本主義発達史をテーマとし、相当分厚な論文を提出させる方法に変えた最初の学生なので特別に懐かしく思われます」

と、のちにわれわれの同人誌に先生が書いておられる。卒業論文の制度はなかった時期に、この方式は当時としては特別だったかと思う。私は同期の市川克己・貞包一明・永松信夫君と４人で、同じ文献だったかを使い、いくつかの範疇に分けて明治初期の時代を分析したレポート（今になれば「論文」と言うのは面映い）を書き、それを金色の背文字を刻印したハードカバーに合本・製本をして提出した。

製本が出来上がったとき私は都合で不在だったが、３人がその論文集を前にした写真が残っている。３人を含めた秀村ゼミの先輩・後輩とは、その後半世紀にわたる交流が続くことになるが、それは「ちかぐるっぺ」という名の同人誌を通じた交流で、その経緯は平成18年12月発行の同窓会報に掲載された逢坂充先輩の「わが『ちかぐるっぺ』に乾杯」に詳しい。そこには私が言い出しっぺだということが記されている。

1958年卒業間際　秀村ゼミ提出論文集を前に
左から　貞包氏　市川氏　永松氏

私の卒業予定の1958（昭和33）年は就職難の時期で、就職試験に失敗した私は１年留年することにしたので、それぞれに就職先を決めて卒業してゆく同期の仲間に取り残されてしまった。秀村ゼミの同期生たちとは、旧法文学部ビルの半地下にあった「社会科学研究会」で先輩・後輩諸氏とたむろしては、議論をしたり全国大学共同ゼミナールの討論資料を書いたりしていた。凍てつく冬には火鉢の炭がなくなって炭俵まで燃やしたりしたこともある。年度が変わってがらんとした社研部室に行き、黒板にまだ皆と議論したメモが残っていたりするのを見ると、たまらなく寂しくなったのを覚えている。実を言うと、そういうわけで同人誌を企て、社研の同期・先輩に声をかけたのが始まりである。

「学問という共通の場を通じたつながりと、その中から得たものを失いたくないということも勿論ですが、もっと錯雑した問題と、もっと実り豊かな内容を持って、ここに何度も立ち返ってくる気持ちは失いたくないと心から思います。ほんとうにこれが第１号となることを祈っています」

私は第１号の編集・発行を担当してこう書いたが、その後この同人誌が50年にわたって続くとは思ってもみなかった。

秀村先生には第２号からご投稿を頂いた。「皆さんお元気ですか」というタイトルで、先に掲げた文章に続いて

「皆さんもそれぞれの職場でなくてはならぬ人として活躍されていることと思います。家庭を持たれ、赤ちゃんも出来て内外共に忙しくある意味では多難なころと思います。…」

と記されている。いま読んでも、胸に温かいものが満ちてくる思いがする。第２号から編集・発行を引き継いだ永松君は、社研メンバーが属していたゼミの高木暢哉、岡橋保、近江谷左馬之介、都留大治郎の諸先生にも声をかけたようだが、都留先生にはお便りを掲載させていただいたあと投稿を頂く前に急逝されて、第５号に逢坂先輩が「都留大治郎先生への鎮魂歌」という追悼記事を書かれた。「ちかぐるっぺ」の企画に当時呼応したメンバー16人中過半数の11人が秀村ゼミ生であったこともあり、秀村先生にはその後ずっと毎号のようにご寄稿を頂いた。玉稿は、先生の学術研究にいそしんでおられる近況であったり、退官後も変わらぬ学問への情熱が綴られていたり、歴史資料の編纂・保護に関する鋭い問題提起などで、箱崎キャンパスで送った日々の純粋な気持ちにたち帰る思いで拝読した。このようにして、われわれは秀村ゼミ生OBとしてずっと母校とつながっていたのだが、もっと学んでいたかったという思いを持つメンバーもあって、「伊能測量の実像―伊豫宇和島領高山浦の場合」（田中貞輝氏）、「北前船の歴史を訪ねて」（恩塚典克氏）、「清沢満之」「竹中彰元」（市川克己氏）などの投稿が見られる。田中先輩は、卒業後も秀村先生の研究室を訪ねて、ゼミ生が提出した論文集を目にしたと言っておられた。

永松君は、1980（昭和55）年の第３号編集後記1980（昭和55）年に「一堂に会することなど夢のまた夢かもしれないが、そんな時が来ないでもあるまい…」と書いた。しかし、それは夢なんかではなく2002年３月に実現した。秀村先生を中心に、逢坂充、萩本広、田中貞輝の各先輩、同期は前記３名のほかに恩塚典克、隈正之輔、田浦利雄、平野豊、広津正一、

2002年３月「ちかぐるっぺ」の集い（於　神田学士会館）
上段　左から　市川氏　広津氏　鈴木氏　筆者有吉氏　貞包氏
中段　左から　恩塚氏　永松氏　隈氏　萩本氏　田浦氏
下段　左から　平野氏　秀村先生　逢坂氏　田中氏

１年後輩の鈴木芳徳の諸氏、いつからか常連として固定していた15名中14名が、神田の学士会館に集まって、短かったが楽しいひと時を過ごした。唯一欠席の立野弘君は、その時既に病気療養中であった。彼は、「『三池』その後」に始まって「四たび―三池からの報告」と「ちかぐるっぺ」に書き継ぎながら、市役所の組合活動・市会議員の経歴を辿り、終始変わらぬ己の信念を貫き通して病に倒れたのだった。

平成20年７月経済学部同窓会東京支部総会で、遅まきながら、秀村先生が前年度の学士院賞を受賞されたことを知った。秀村ゼミ生一同は大変喜んで大いに盛り上がったものである。その席上で、われわれ同期は卒業して50年、「ちかぐるっぺ」も切りがいい第10号でFinalにしようかという話が持ち上がった。この原稿を書いている今は、平野君と最終号の編集をやっている最中である。第８号に「癌と共にある日々」を寄稿して逝去した永松君については、奥様から寄せていただいた遺稿を９･10号にも掲載することができた。いまだ療養中の立野君の奥様からは「声を掛けてくださって嬉しい」というお便りと一緒に、彼の元気な頃の議会発言メモが寄せられている。最終号編集のため、いま「ちかぐるっぺ」のバックナンバーを１冊ずつ手に取っている。ガリ版刷りの第１号は、紙がすっかり変色して表紙の背がぽろぽろ剥がれかけている。ページを繰っていると、期せずしてメンバー一人一人の軌跡が浮かび上がってきて、つい感慨にふけってしまう。あの箱崎キャンパスで、仲間と一緒に学んだことは何であったろうか。事実・現実から思考すること。「はたしてそうなのか」と立ち止まって考えること。そして理不尽には毅然と対すること、であったと思う。

それぞれの年月を経たいまは、心豊かに自由な時間を過ごしているメンバーが多い中で、秀村先生は仲間うちで数少ない生涯現役でおられる。「ちかぐるっぺ」はひとまず最終号となったが、秀村先生にはますますお元気で学究に精励されて、ずっとこれからもわれわれを励まし続けていただくよう願ってやまない。（元・安田海上火災社長・会長、経済学部同窓会元東京支部長）

リレー随想

往時を思い出すままに

朝日新聞特別顧問
箱島　信一氏
1962（昭和37）年卒

九大に入学した翌年、家業に専念するため１年間休学したから、５年間在籍したことになる。家業というのは筥崎宮のすぐそばで曾祖父以来営んでいた醤油醸造業で、入学して程ないころから始まった日本経済の高度成長は、求人難という形で我が伝来のスモールビジネスを直撃した。父はすでに他界し、家業が沈没に向けてのカウントダウンという状況の中で、学生の身ながら配達、集金、人集めなどで大わらわの日々だった。本来ならば、残余の時間は寸暇を惜しんで勉学にあてるべきだった。だが、自宅から歩いて10分ほどの近さだったキャンパスにたまに顔を出しても、行き先は新聞部室。安保反対のデモにも結構参加した。そんなわけで古希を過ぎた今、貴重な知の原始蓄積時代をおろそかに過ごしたことをつくづく後悔している。10年ほど前、新入生を相手に六本松で講演したことがあるが、学生諸君に「一に勉学、二に勉学」と強調したのは、その反省を踏まえてのことである。

落第したお陰で毎年、二つの卒業年次から同窓会の案内を受ける。だが、同窓の諸君が六本松や箱崎の思い出を懐かしそうに語り合うのを聞きながら、記憶の共有部分が自分にはかなり欠落しているのを思い知らされることがしばしばだ。正直言って、は

1960年　三池争議で労組側の座り込みピケに応援参加の九大生たち。手前左端、サングラス着用が筆者箱島氏、その右が平川亮一氏（法学部、後に名城大教授・故人）

ぐれ学生だったという意識は拭えない。しかしそんな私にとっても学生時代は、やはり心底懐かしい。

当時の九大経済学部はマルクス経済学全盛で、戦時中九大を追われ戦後復学された向坂逸郎、高橋正雄の両先生が、いわば看板教授だった。しかし同じマルキストといっても肌合いを大いに異にし、三池争議がお二人の間の溝を広げたようだ。当時、石炭の閉山合理化を巡る三井三池争議はクライマックスに達し、総資本―総労働対決の様相を呈したが、この争議をめぐって向坂先生が総合雑誌に「正義が最後には勝つ」と熱い信念を披瀝すれば、間髪をいれずに高橋先生が「勝つのは強い者だ」と反論、といった塩梅だった。

向坂先生の退官最終講義が行われた日のことは、今も脳裏に焼きついている。演題は「マルクスの世界観における資本論の地位」。私はこの記念すべき講義にまだ高校生だった弟を連れて行った。先生はマルクスを「地球をはみ出した大天才」と言われたが、冒頭部分をテレビ局の取材チームがカメラを回し、一種オーラが漂うような講義の雰囲気だった。

同じマルキストながら高橋先生のマルクス観はかなりクールだった。高橋ゼミは生きた現実経済を対象とし、テキストは最近版の経済白書だった。私はどちらかといえば高橋先生の薫陶をより受けたが、卒業を間近に控えて新聞社への入社を報告に教授室に伺ったら、「大学人はもっとジャーナリスティックであるべきだし、ジャーナリストはもっとアカデミックであるべきだ」と言われた。長い記者生活を終えた今、改めて至言だと思う。

高橋先生とは、社会に出た後も東京のお宅で月一回開かれた卒業生を集めての勉強会に参加させていただいた。会社勤めや役人をしている教え子たちがこもごも語る実社会の話に、興味深く耳を傾けられる先生の旺盛な好奇心と「生涯一学究」の姿勢に感銘を受けたのは、私だけではない。もう30年余り前のことになるが、ロンドン特派員時代、先生がイギリスに来られたことがある。ゼミの先輩で後に出光興産の社長になられた出光裕治さんと共に先生をお迎えし、夜遅くまで歓談したことも忘れ難い思い出だ。

複数のゼミに参加出来たので、高木暢哉先生と近江谷左馬之介先生のゼミにも加わった。高木先生は温厚な碩学で、ご子息と高校の同級生だったということもあって何かと親しくしていただいた。銀行論がご専門で、ことに中央銀行の歴史と論理を踏まえた日銀法改正批判は今も記憶に鮮明だ。後に経済記者として日銀を担当した際、同行の若手論客たちと居酒屋で「日銀は政策当局か否か」というテーマで侃々諤々の議論をした際、私の主張の論拠は先生の講義内容を拝借したものだ。駆け出しの福島勤務時代、東北大に集中講義に来られた先生からお電話を頂き、仙台まで出向いてご馳走になったこともある。

サラリーマンなりたての近江谷ゼミの仲間たち
左から　北御門氏　近江谷先生ご夫妻　影山氏　平川氏　野中氏
と筆者箱島氏。1962年４月　鎌倉の稲村ヶ崎海岸で

近江谷先生は当時助教授でまだ30歳代半ば。ヨーロッパの留学からの帰国間もなく九大に着任し財政学の講義を担当された。学界だけでなく官界やメディアの領域にも広く交遊をお持ちで、折々の雑談のなかで伺う遠い世界の話は、井の中にあった学生にとっては刺激に満ちたものだった。ゼミの仲間と引っ越しの手伝いに行ったのも懐かしい思い出だ。卒業したばかりの昭和37年春、中学以来の親友である北御門稔君ら近江谷ゼミの仲間数人と先生の鎌倉のお宅を訪ねた際、一人が「サラリーマンになったばかりの僕らが心すべきことは何でしょうか」と質問した。一呼吸置いて先生から返ってきたのは、「ワイシャツは洗濯のきいた白いのを毎日着て行くとことだね」。都会人らしい先生流儀のアドバイスだと感じ入ったものだ。私の卓上には、先生が愛用されていた拡大鏡と文鎮と書類挟みがある。奥様から形見に頂いたもので、見事な工芸品の３点セットは私の宝物である。

新聞部にいたお陰で、経済学部に限らず広く学内の先生方と接する機会に恵まれた。法学部の井上正治教授のお宅に、松川事件の控訴審判決について論評を聞くため訪問したことがある。浴衣姿でくつろいだ先生が語られるコメントは緻密な論理で貫かれ、これをきっかけに先生の刑法各論を何度かもぐりで聴講した。「未必の故意」といった概念は経済学部の学生にとっては極めて新鮮で、別世界を覗くような興奮を覚えた。

今道友信助教授は東京芸大の前身である東京音楽学校に在学の経験をお持ちの詩人肌の哲学者だった。イスラエル当局の手で、逃亡中の元ナチス幹部アイヒマンが逮捕されるという事件があり、原稿依頼のため別府団地に先生を訪ねた。そんな縁もあって卒業の際、フランスの哲学者ギットンのエッセー集「読書・思索・文章」とネクタイを頂いた。先生はその後東大に移られ、日本を代表する哲学者として退官後も国際的に活躍しておられる。数年前、卒業後初めて先生と再会し食事をともにする機会を得た。その時、この本を持参したが、先生は私の求めに応じて署名とともに心温まる一文をその扉に書いて下さった。遠い学生時代の記憶が甦りワインの微醺も手伝って、「人生佳きかな」の思いが沸々と込み上げてくるのを覚えた。

私は九大を卒業して今年で47年。そして６度目の年男となった。６人の恩師のことを思い出すままに綴ったが、今道先生を除きいずれも鬼籍の人となられて久しい。（朝日新聞社・元社長、九州大学経営協議会委員）

リレー随想

おじさん大学生の記

長田　武郎氏
1967（昭和42）年卒

私は、1965（昭和40）年４月に経済学部３学年に編入学する。九大農学部林学科卒業・企業勤務・健康を害し退職・療養生活を経ての学士入学であった。32歳、メタボリ体型の「おじさん大学生」は９年ぶりの箱崎キャンパスでの勉学に取組む事になった。

その目的は、社会人生活の間に体験した事で得た知識やノウハウを活かし、動態的な経済・社会の現象を調査分析して地域開発に貢献する業務を行う事を意図していて、それには経済学を主として、法学・社会学・社会心理学等の知識やものの見方、考え方を身に付ける必要があると思い、健康回復に努めながらの勉学を志したのである。その点、九大の文系学部間の科目聴講には融通性があって好都合だった。

私は、関心を持った科目は出来るだけ聴講する事にした。けれども、学生達は「おじさん大学生」に遠慮気味で、暫くはダベリ合う親しい人も出来ずに孤独であった。

故・別府正十郎先生
昭和42年「別府正十郎助教授追悼論文集」（経済学研究・32巻５・６合併号）より

当時の九大経済学部はマルクス経済学が主流と言われ、『資本論』を研究対象とされる先生が多かったようである。しかし、私はマルクス・資本論に限定される事なく、経済学を多面的にみようと思っていた。

そこで先ず、マルクスとその対極にいるとされるマックス・ウェーバーのそれぞれの理論を対比検討を試みたのである。

この様な私にとっては、リカードとマルクスを結ぶ延長線上に論点を置いて理論展開をする木下教授の「世界経済論」の歯切れのよい講義と、『資本論』が触れていない国際貿易を対象にした吉村教授の「国際貿易論」の重厚な講義が印象に残る。それと、マクロ経済学に関心のあった私は武野先生の「経済学原論特講」と英原書「Social　Accounting」講読に興味を唆られた。

当時、私が感銘を受けた事は、『資本論』出版百周年記念事業の一環として九大経済学部主催の「全国大学経済学部生シンポジウム」で行われた来賓の高橋正雄九大名誉教授（マルクスの経済学者）と宮崎義一横浜国立大教授（近代経済学者）の基調講演であった。

両教授の講演は「マルクス経済学と近代経済学は、戦後の時間的経過の中で、両理論を体現化したそれぞれの政治体制の社会や生産様式の態様の多様化と変化をもたらしており、その事が両理論共に内容の修正変化を余儀なくさせている。その事が両理論の間に受容可能性を生じ、対話の可能性を期待させている。」という内容だったと思う。私は、この傾向が進めば、当時、両理論が体現された東西政治体制の深刻な対立が対話により解決し、全世界の人々の核戦争の脅威も消失するのでないか、との期待を抱かせたのである。

なお、このシンポジウムは九大経済学部学生の見事な自主運営により、聴衆の一般学生からの多くの

質問も含めて、白熱した討論で盛り上がり、大成功裏に終わった事も印象に残る。

ゼミは別府正十郎先生の「資本会計論」を選択した。先生は飾り気のない、線の太い人との印象だったが、顔色がすぐれず病をおしてゼミ指導をされていたのではと思う。従って、ゼミではコンパなど、先生と学生達との懇親の場を持つ機会はなかった。

しかし、先生のゼミでの学生指導は厳しくも熱心であった。学生達に次々と質問して意見を述べさせ、懇切な解説をして頂いた。私も積極的に討論に参加する活気ある雰囲気であった。そして、ゼミ専攻生の中に公認会計士志望者も現われ、先生に受験指導の講習会をお願いしたが、先生の病状悪化で実現しなかった。このように、私達学生は、先生の更なる御指導を仰ぐ期待していたのだが、先生は昭和42年２月に癌で御逝去された。

先生のご冥福を心からお祈り申し上げたい。

「おじいさん大学生」も卒業後42年、76歳のおじいさんになったが、昨年来の金融恐慌で経済書を手に取る機会が多くなっている。

リレー随想

木下悦二先生「世界経済論七〇年」に思う

中央大学・教授
田中　素香氏
1969（昭和44）年卒
1971（昭和46）年博士入

木下先生はお元気である。当年八八歳だが、ここ数年『世界経済評論』に毎年論文を掲載し、学会発表も年に数回。それも、昔語りの論文ではなく、「サブプライム危機」、「グローバル・インバランス」といったまさに世界経済の最先端のテーマについて高水準の論文を執筆される。引用ないし作成される統計資料がまたすごい。若い研究者は半ばあきれつつ先生の著書を読み直し、年配の研究者は「木下さんのせめて百分の一でも…」と励まされている。

木下先生は九大定年時の退官記念論文集に「世界経済論四〇年」という小論をお書きになった。「酔わせる」とある研究者がいったほど内容の濃い名文であった。

退官後下関市立大学の学長を二期、同大学の改革を進め、偏差値を一気に引き上げて退任される際に、蔵書はさっぱりと若い同僚たちに配ってしまわれた。「悠々自適」の心境かと見えたが、その後も久留米大学経済学部長、福岡国際大学学長をつとめながら、年に数本、少なくとも一本、世界経済の新局面に関する論文を書き続けて、今日に至る。

先生は数百人のゼミ生をお育てになった。一九八〇年還暦の時には大学院ゼミ生（弟子）中心に西鉄グランドホテルで、また弟子一同との古稀記念論文集（木下・田中編『ポスト冷戦の世界経済』文眞堂）の出版には学部・院双方のゼミ生が多数集まり九二年八重洲富士屋ホテルで、盛大な祝賀会を開催した。先生に可愛がられ、先生と「気のあった」ゼミ生たちは、先生を囲んで何十回も懇親会や旅の会をもったりしているようだ。

ゼミテキストが『資本論』だったことに惹かれて木下ゼミの門を叩いたのは一九六八年（第一巻の刊行百年記念の年）、以来四〇余年、先生の著書は国際経済学会の若手研究者にとって新時代を解剖するための指針となった。学問だけではない。長野県の野尻湖畔には「大学村」と呼ばれる別荘村があり、先生の別荘があった。夏休み、先生はここにゼミ生を呼んで、読書会やアルプス登山の拠点にされた。一九七一年の白馬岳を皮切りに八四年の鹿島槍まで、先生は、多数の九大生に北アルプス、南アルプス登山の醍醐味を教えてくださった。七四年の槍ヶ岳には奥様もご一緒で、南岳経由で下山する際にはオコジョ（山イタチ）が出てきて挨拶した。野尻湖畔には中央大学宿舎がある。若い中大ゼミ生と合宿しては往事を偲ぶ。

木下先生は二〇〇三年、それまでの研究を集大成した、『我が航跡―国際経済論探求の旅―』（東北大学出版会）を刊行された。「世界経済論六〇年」で

1984年　定年退官、最終講義のときの木下先生

ある。九大定年後中国現地に幾度も足を運び、現地調査された中国経済論も輝いていた。この著書が「旅の終り」と一時思ったりされたようだが、それもやはり「旅の途中」であった。そしてインターネットを活用する独自の研究スタイルを確立された。「新らし好き」らしい変身であった。インターネットなら現下の経済問題に関する資料はほぼ無尽蔵。資料を渉猟し、熟読・熟考し、執筆し、推敲する。時間はたっぷりお持ちである。昔の周到な研究スタイルとインターネットがドッキング。

現在の大学は本業以外がやたらと忙しい。国が大学予算を毎年削るので、カネを工面するなどのために、学部長から准教授まで会議また会議、そして分厚い申請書書きにも時間を取られる。国は学問に恨みでもあるのだろうか。徒労に駆り立てられ、勉強の時間や余裕は極端に乏しい。そのような現役研究者では木下先生に勝てるはずはないのである。

それにしても、研究が本当に好き、新しいことが好き、知を愛する、ということがなければ、こうはならない。あの道元の、「悟りを開いたと思うて歩みを止むるなかれ、道は無窮なり」、が浮かんでくる。

先生は今『世界経済論』の新著に挑戦中だ。時代は世界金融危機と世界恐慌へと急展開し、体制危機の様相を呈している。これまた一九五〇年代から七〇年代に世界恐慌論など大状況論を手がけた世代の得意分野である。追い風が吹いている。「世界経済論七〇年」、どのような著書になるのか、今から楽しみである。

1974年夏　槍ヶ岳より下山中
左より　木下先生奥様　杉田憲道氏（現、熊本学園大教授）
木下先生　筆者田中氏

リレー随想

秀村ゼミ多久合宿から三十五年

中楯　　潔氏
1975（昭和50）年卒

昭和48年春、まだかろうじて残っていた石炭産業の歴史に関して興味があったこと、少数のアットホームなゼミの雰囲気に引かれて、秀村ゼミに入ることにした。室内の演習だけではなく、石炭火力発電所の見学と帰路柳川でのうなぎを堪能、日本経済史専攻の留学生との交流などいろいろな経験をさせていただいた。某氏のようにストームをかけたことはないが、先生の自宅までお邪魔して歓談した記憶もある。

経済学部では珍しかった卒論が必須であり、４年生になっての話とやや楽観視していたが、最後は結構大変であった。おおよそ経済学とは思えないような題目ははっきり覚えていないが北九州における鉄道事業の発展過程研究という、趣味の世界となんら変わりがないような代物を書き上げたはずである。もし目に触れることができるならば是非お目にかかって見たいものだと思っている。

秀村ゼミで特記すべきものはやはり毎年行われた多久合宿である。私が多久合宿に参加したのは昭和48年７月と昭和49年５月の２回である。多久市はゼミのテーマであった石炭産業がかつて栄えた地区であり、一方で江戸時代の文化が色濃く残る歴史環境にあふれたところでもあった。昭和48年のゼミの参加者は秀村先生をはじめ大学院生の東定宣昌、ゼミ生は奥川潔・荻本哲之・道添直樹・本松保博・今野孝・梅田裕一・大河内政則・川西晴紀・真野季雄・中楯に先輩の納

昭和48年
寒鶯亭ドラム缶風呂の秀村先生

昭和49年　多久町細川邸にて。後列左より　中西氏　細川氏　筆者中楯氏　今野氏。前列左より　尾田氏　秀村先生　鬼塚氏　石田氏

富一郎・服部民子を加えた総勢14名、昭和49年のゼミは会社訪問の時期と重なり４年生の参加は少なく先生、今野・中楯・石田光明・尾田竜治・鬼塚一成・中西茂の総勢７名であった。多久に行くたびに当時多久市営図書館司書の細川さんには大変お世話になった。２回とも、多久町の成蹊公園の中にある「寒鶯亭」で寝泊りし、ゼミのあいまあいまには多久町界隈散策を繰り返して多久の歴史環境に触れて回った。細川さんが長年にわたり収集された石炭産業に関連した道具などを身近に手に触れることができたのもこの時である。夜は必ずコンパを開催し、周りに人家がないことをいいことに夜遅くまで大騒ぎをした記憶がある。「寒鶯亭」には風呂がなかったので、ドラム缶にお湯を入れコンロで加熱して風呂にした。学生達に手本を示した秀村先生のドラム缶風呂の入浴シーンは今でも語り草になっている。ゼミの勉強の内容はすっかり忘れたが、多久合宿の田舎での生活のことだけが印象深く思い出される。

多久ゼミナールに関して欠かすことができない唐津線（久保田―西唐津）について触れておきたい。JR九州の唐津線は九州でも最も古い歴史のある鉄道のひとつである。唐津炭田の石炭を唐津港に運搬するために明治31年に妙見（現西唐津）―山本間に開業した唐津興業鉄道がその源であり、明治32年には薊原（現多久）まで開通している。明治33年には唐津鉄道に社名変更し、35年には経営不振のため九州鉄道に合併され、現在の路線である久保田まで開通したのは明治36年である。佐賀から唐津に向かう路線とのイメージのある唐津線が唐津から佐賀方面に向かって敷設されたという事実は大変興味深い。今年西鉄が100年ということや当時まだ現在の筑肥線が開通していないことに比べても、唐津線の110年余の歴史の重みをひしひしと感じるのである。

我々の合宿の頃、福岡から多久に行くには佐賀で長崎本線から唐津線の西唐津行きに乗換え多久駅で下車するのが定番であった。昭和40年代にはまだ蒸気機関車が引く列車も残っていたが、ゼミをサボって蒸気機関車の撮影に行くような不届きなことはしていない。当時の佐賀駅は旧駅舎（明治24年開業、昭和51年に高架）の地上ホームが残っていたし、唐津線の各駅には石炭運搬を担った鉄道らしく広い構内がまだ残っていた。

昭和50年の卒業後しばらく多久とのつながりは途絶えた。昭和57年、家内が多久出身であり岳父は秀村先生の古文書村のメンバーであったこともあり先生に仲人をお願いしたところご快諾をいただいた。結納は多久市で行なうことになり、８年ぶりに先生と多久を訪れることになったが、以降多久市との縁が続く。昭和60年代には、西九州自動車道路が西へ伸び、やがて多久インターチェンジができたので、福岡から１時間そこそこで到達できるほど便利になった。佐賀駅は高架駅に替わり頻繁に特急電車が行き交うようになった。唐津線は、多久の隣の厳木駅にはレンガ造りの給水塔が残されているなどまだ昔の面影が見られる。しかしながら、次第に沿線の駅が味気ない駅舎に変わってしまった。つい最近まで昔の面影が残っていた多久駅も平成20年１月に近代的な橋上駅舎に変わってしまった。多久合宿の時代を象徴する一つ一つのものがしだいに消え失せようとしている。

平成15年９月多久の義母が突然多久市報（No507）を送ってくれた。そこには「多久古文書の村」が特集として取り上げられており、村長の秀村先生へのインタビューや横尾市長・細川さん・川副さんの対談などが紙面の６ページに渡ってとりあげられていた。我々が西渓公園の「寒鶯亭」で合宿をやったこと、ドラム缶の風呂を作ったことまでが書かれてあり、多久秀村ゼミのコンパの写真まで掲載されているのには驚いた。この特集には昭和60年に「多久古文書の村」がサントリー文化財団の地域文化賞を受賞した時の祝賀会の写真も掲載されていた。この写真は亡き岳父が撮影したものであり、そこに岳父の姿を見つけて大変嬉しく思った次第である。

平成19年７月に秀村先生の日本学士院賞・恩賜賞受賞のお祝いの会が福岡の日航ホテルで開催された。たまには帰省して親の見舞いをしてはどうかという東定さんの温かいお計らいで、東京在住の私までお招きを頂いた。同日父の米寿のお祝いを行う予定で

あったので、私にとってはありがたい日程であった。

当日は大変お元気な秀村先生と奥様をはじめ、秀村ゼミで一緒だった今野孝・石田光明の両氏にも久しぶりに再会することができた。横尾多久市長も会場に来られたので、遅ればせながら多久市報への秀村ゼミ合宿写真掲載の御礼を申し上げた。先生は平成17年に第３回徳川賞を受賞されており、奇しくも菊のご紋と葵のご紋の両方から賞をもらわれた訳で、大変おめでたいことであった。これまでの先生の歴史への取組みが各方面から幅広く評価されたものであり、こんなにすばらしいことはないと思った。外は台風接近で心配したが、先生から大変お元気なご挨拶をいただき、和やかな雰囲気の中でお祝いの会を終わることができた。先生と奥様のご健勝を心からお祈りしたいと思っている。

平成19年　日本学士院賞･恩賜賞受賞をお祝いする会にて　秀村先生と奥様　「ホテル日航福岡」にて

リレー随想

玄海の浪の華

石田　光明氏
1976(昭和51)年卒

ああ玄海の浪の華
　銀蛇の舞に似たるかな
今神風に旗高く
　幕邪の剣手に執れば
金鼓奮いて蓋世の
　遊子は迫る敵の陣

手許にカセットテープがある。
挟み込んであるカードによると
内容：「古文書を読む会」忘年会
日時：1973年（昭和48年）12月21日
場所：六本松　源蔵にて
出席者：秀村選三教授
　　M君、S君、O君（以上　法学部）
　　F君（文学部）
　　K君、私（経済学部）
　　M君（工学部）
　　氏名不詳（医学部）

当時大枚をはたいて買ったソニーの小型テープレコーダーを忘年会に持ち込んで録音をしたカセットテープだ。

再生してみると秀村先生が旧制福岡高等学校応援歌 「ああ玄海」 の歌唱指導をされているところから始まっており、その後は出席者それぞれの出身高等学校校歌の披露が続き宴は段々とたけなわになっていく。

輿望は重し丈夫の
　颶風の翼身に借りて
征塵高く蹴たつるを
　防ぎ止むる者あらば
天地貫く自治の気に
征衣の露と打ち払え

一浪ののち昭和47年に入学した私は六本松教養部図書館の向かいに小さな建物、玉泉館を見つけた。中にはいると土器をはじめとした考古学術品が多数陳列されており、展示品を一覧した後お茶を出していただけたので助手の手塚さんと話をしていると、ここ玉泉館で経済学部の秀村教授が古文書を読む会を開いておられる旨を聞き、早速参加させていただくことにした。

古文書を読む会では秀村先生のご指導により多数の古文書を読むことによって筆書きによる文字の読み方を習得し、その上で古文書に記載された事実を読み、そしてその古文書が書かれた時代背景、歴史にまで考察が行われ、議論が飛び交ったものであった。先生のご指導が終わると先生を中心に談論風発、話題のやり取り。話題は人生論にまで及び夜も更けてゆくのであった。

そのメンバー有志が集まり忘年会を開いたのが冒頭のテープに残された忘年会である。

忘年会参加者の所属を見れば分かるように古文書を読む会の参加者は複数の学部に亘っており、それは先生があらゆる人をその人のあるがままに受けいれて育ててくださった証であり、また先生の薫陶を

受けた人材が学部の文科理科を問わず多岐にわたり、今この時、社会に貢献しつつ活躍している証でもある。

恥ずかしいことではあるが、先生のゼミの卒論も中途半端で終わってしまい、また先生が平成19年に日本学士院賞、恩賜賞を受賞されることとなった『幕末期薩摩藩の農業と社会―大隈国高山郷士守屋家をめぐって―』もいまだ読めずに書類押さえの文鎮として机上で私をみつめていることからも分かるように、私は先生のアカデミックな面の弟子にはなれなかった。

しかし先生の人となりに触れ、先生の薫陶を受けたことにより今の私があるし、学生時代に先生に教えていただき先生とともに高歌放吟した旧制福岡高等学校応援歌 「ああ玄海」 を今日に至るまで折に触れ口に出して歌ったり、心のなかで歌ってきたことで今の私がある。

私の青春は秀村先生とともにあり、そして今もまだ続いている。

先生、先生　いつまでもお元気で

戦わんかな時至る
　ああ勝たんかな時来たる
天の暦数指顧のうち
　見よ九天の雲晴れて
虹は色濃き筑紫潟
　凱歌はこもる梅の花

昭和48年　玉泉館内部　先生のお土産のお酒とともに。後列左から筆者石田氏　高橋氏(文学部）下川氏（法学部）金子氏（経済学部）福島氏（文学部）松尾氏（法学部)。前列左から　秀村先生　三宅氏（工学部）

リレー随想

九大周辺、ある時代の断想

下関市立大学経済学部教授
川本　忠雄氏
1974(昭和49)年卒
1977(昭和52)年博士入

過日、福留久大先生（同窓会報世話人）から執筆依頼を受けた。往時を知るOBが、その記憶が何であれ記録して残すべきである、というのが依頼の理由であった。私は全くその意思もなく固辞したが、先生の紳士的ではあるが、しかし頑としてぶれない姿勢に敬意を払い駄文を書きたい。私も還暦。記憶違いも多々あると思う。御容赦を。

1968年、私は入学した。何かが始りそうな予感の春であった。教養部学生会館のトイレの汚い壁に小さい落書きがあった。「プロレタリアはこの革命で鉄鎖のほかに失う何物もない。しかし獲得すべき全世界がある。万国のプロレタリア団結せよ！」。幼き内面に沁みた。マルクスとの出会いである。

入学後、文科の９組（経済学科、第２外国語ドイツ語専攻）に属した。語学授業時（英語･ドイツ語）にだけ一緒だが、九大の同級生というとまずここでの50人を思い出す（卒業後、ほとんど音信不通であるが)。井上君、今井君、植本君、宇佐美君、岡崎君、北島君、木村君、金君などなど、皆しぶとく生きているか。

教養部では川口武彦先生の経済学を受講した。先生の誘いもあり毎週の読書会に参加した。最初のテキストはエンゲルス『空想から科学へ』であった。この読書会で関源太郎君（現九大経済学部教授）と出会う。川口先生は倫理的というイメージがした。向坂逸郎先生と話す機会を得たり、三池労組主婦会との交流なども持った。社会科学と政治的実践との関係について色々悩み考える時代でもあった（特にマル経は)。川口研究室の隣が新進気鋭の原田溥先生の研究室であった様に記憶している。

1969年５月～11月まで教養部は大学管理法反対を契機にして無期限のバリケードストライキに入る(経済学部も同期間スト)。

経験は未だ余熱を帯び、思い起こせば恥多きことの数々、反吐を吐くことばかり。どこの世界でも中

途半端は何も生み出しはしない。現在、日本各地で「○○闘争の集い」と称する集りが多数開催され、かつての武勇伝が語られている様だが、私はその心情がさっぱり理解できない。少し能天気ではないのか。

学部に進学して所属したのが近江谷左馬之介ゼミ（財政学）と高木幸二郎ゼミ（経済原論）であった。当時は複数のゼミに所属し単位取得もできた。しかしスト直後の白けた学内雰囲気もあり、ゼミ生同士の交流は緊密では無かったように思う。現在も全くその消息を知らないのは、私だけか？近江谷ゼミには足掛け４年間在籍し、最初のテキストはガルブレイス『新しい産業国家』であった。近江谷先生はドイツ語が極めて堪能で都会的なシャープさを感じた。高木ゼミには１年間だけ在籍し、高木先生の『恐慌論体系序説』がテキストであった。先生が監訳されたマルクス『経済学批判要綱（全５冊）』はチンプンカンプンであった。対外的な高名ぶりに反して、当時の学部生には好々爺の印象が強い。

私は九大新聞部に属していた。当時の名部長が２級上の靏川洋さん（現福岡市副市長）であった。何かやたらに麻雀ばかりしていた記憶がある。1971年に部室（箱崎キャンパスのグラウンド横、蒲鉾型のボロ小屋）が失火で焼失した。翌朝、焼跡で茫然としている部員の前に、正田誠一先生（新聞部顧問）が来られ、少し怒りを含んだ悲しそうな眼をされていたのを思い出す。ほとんど批判めいたことを言われなかったのが逆にこたえた。前述の関君（荒牧ゼミ）、１級下には永田裕司君（荒牧ゼミ、現福岡大学）がいた。当時、吉本隆明（『言語にとって美とは何か』『共同幻想論』等）、高橋和己（『憂鬱なる党派』『邪宗門』等）などが良く読まれていた。

夜は米一丸のバス通りにあった屋台で連日連夜の痛飲。喧騒狂乱、言いたい放題。女経営者の名前に由来する「リエレストラン」が九大生の癒しの場であった。その中に深川博史君（現九大経済学部教授）もいた。彼の朝鮮語での「釜山港に帰れ」はなつかしい。少し前の世代に、院生の稲田公範さん（現九州産業大教授）、平勝廣さん（現同志社大教授）、西田勝喜さん（現熊本学園大教授）、田中素香さん（現中央大教授）達がいた様に思う。

当時の月見町～坂本町～大和町～米一丸は、周囲に松林も残り、畑も多く、九大生の間借・アパートが点在していた。路線バスが砂埃をまき散らしながら走る情景は西部劇の場末の感すらあった。昨今の小綺麗なアパート群とは隔世の感がある。

私と同じ坂本町の間借（４畳半１間、台所・風呂なし、トイレ共同）に院生の中村靖志さん（木下ゼミ）が入居して来た。ちょうど卒業間際の将来に不安を覚え始めた時期であった。愚かしくも楽しかった学部時代の終わりである。大学院に入ろうと思った。しかしそれから３年間かかるのである。

私は勤勉な学生ではなかった。九大から最終的に巣立つまでに足掛け15年も要した。「川本は九大を愛したが、九大は君を愛したかどうかはわからない（木下先生談）」。しかし様々な人々との交流、九大周辺での多くの経験が現在の自分を支えてくれている。小手先の知識ではない土台をこの時代が与えてくれたように思う。現在、世界は100年に一度の大恐慌の影におびえている。しかし資本主義は元々、不安定なもの。大恐慌など屁でもない。

今、思い出しても印象に残っているのは授業内容やキャンパス内の出来事は少ない。六本松教養部の背後の丘（輝国町あたりか）の目に沁みる新緑、亭々舎（六本松）あるいは三畏閣（箱崎）での高歌放吟、九大前電停のうどん屋（その後、トンカツ屋）、深夜に遠くで聞こえるチンチン電車の音、箱崎東映のかすかな小便の臭いとタバコの猛煙、箱崎毎日会館のパチンコの音、年の瀬の箱崎商店街の賑わい。

もう一度、生まれ変わっても同じことをすると思う。

リレー随想

いま振り返る学生時代
―都留先生やゼミのこと―

安髙　優司氏
1982（昭和57）年卒

私は昨年（2008年）４月に九州産業大学の教員として26年ぶりに福岡に帰ってまいりました。帰ってきたと申しましても、家族は関西に残し単身でこちらに出稼ぎに来ていまして、九州と関西を行ったり来たりという状態であります。もともと私は福岡の生まれで、実家も南区にあったのですが、勤め先の関係から関西での居住が長くなり、おそらく福岡に戻ることもなかろうと判断し、数年前に両親も関西に移住して

おりました(いわゆる呼び寄せ現象)。ところが昨年、結果的に私だけが福岡に戻ることになってしまったわけです。これも生来の計画性のなさによるものでして、企業のサラリーマンを止めて大学に転職したことなども含め、行き当たりばったりの人生を送っていることをしみじみと反省している毎日です。とはいえ、生まれ育った土地ですからやはり懐かしく、また故郷で働けるというのはとても嬉しいことだと思っております。

勤務している大学の研究室は、天神のビル街やドーム球場、博多湾、遠くには脊振山などが一望できる素晴らしい眺望に恵まれていまして、昔を懐かしむにもってこいの場所です。ここから見える福岡の風景は、20数年前とは多少違って近代的な建物や道路なども増えてはいますが、その明るさと活気は少しも変わっていないように感じられます。毎日通勤に利用するJRの車窓からは九大の箱崎キャンパスが眺められ、昔と変わらない威容に感銘を受けています。ただし、先日ある学会に参加するために箱崎の九大を訪れたところ、本当に私が通っていた頃と変わっていないために、近くで見るとそれらの建物群はホーンテッド・マンションと化していることがわかりました。われわれ卒業生にとっては懐かしく嬉しいことですが、現在の学生さんにとっては早く新キャンパスで学べる日が来ることが待たれるようです。

ところで私は昭和53年に入学し経済学科に在籍、３年次からは故・都留大治郎先生のゼミに所属しておりました。都留先生のご専門はご承知のように農業経済でしたが、ゼミで農業のお話を聞いたことはあまりなかったような気がします。また、ゼミで直接学問的なご指導を受けた記憶もそれほど多くなく、なぜかコンパやゼミ旅行など宴会で先生と一緒に騒いでいたようなシーンばかりが記憶に残っています。

都留先生のゼミを志望した理由を思い起こすと、博多弁丸出しで政策の批判をされる先生の講義があまりにも面白く、毎回腹を抱えて笑わせられたことが決め手ではなかったかと思われます。そのような安易な理由でゼミに入ったものですから、最初のゼミで私が発表する際、いつもとは違う険しい表情の先生から次々と厳しい質問が飛んできたときには、狼狽のあまり何を答えたか全く覚えていないというあり様でした。他のゼミ生もおそらく似たような状況であったと思われ、いつものような楽しい講義などを期待していたところ勝手が違い、緊迫した雰囲気の中で何とか指名されずにやり過ごすことだけを

1980年　都留ゼミ合宿にて　前列左より都留大治郎先生　都留菜摘さん　原伸子さん（現・法政大学教授）深川博史さん　右端中段が筆者安高氏

念じていたはずです。初めてのゼミで、実は厳しい先生であることを認識するとともに、これが大学の演習というものかと思い知らされたものでした。ただし、これは先生の作戦であったことが後に明らかとなり、その後は酒の席での指導が中心となったことは前述のとおりです。

都留先生には卒業後にも色々とお世話になり、私が卒業後しばらくして大学に戻ることを検討していた際には、ご入院中にも関わらず長時間お付き合いいただきました。残念ながら諸般の事情からそれは叶いませんでしたが、大学の恩師とは時には親よりも頼りになる大きな存在であることを痛感いたしました。一見、そっけない印象でありながら実は学生思いの温かい先生であったことは、後になればなるほどしみじみと感じられたものです。残念ながら早くに他界されましたが、私自身が数年前から大学で若い学生を相手にするようになり、都留先生のなんとも言えない不思議で魅力的な人柄があらためて強く思い出される次第です。

私が所属した年度の都留ゼミは先生の御退官が近い時期であったはずですが、それにしては比較的大所帯であったと記憶しています。決して宴会ばかりしていたわけではなく、サブゼミを自ら立ち上げるなどなかなか熱心な人たちが集まっていたと記憶しています。ゼミの先輩には現教授の深川博史先生がいらっしゃいましたし、後に法政大学に着任された原伸子先生が当時助手としてゼミを指導されました。また、同期のゼミ生には工学部を卒業されて学士編入された楠雅之さんや、海外留学から帰国された先輩の樋口さんなど多才なメンバーが集っていました。いずれゼミの仲間の皆さんと再会することがあれば、昔に戻って当時の思い出を語らい合いたいものだと思います。

最後に、このような貴重な投稿の機会を与えてく

ださった同窓会元事務局長の福留久大先生、前事務局長の丑山優先生、福留先生との酒席にお誘いくださった荻野喜弘先生に厚くお礼申し上げます。同時に同窓会費を長年支払い忘れていたことを深くお詫び申し上げます。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

リレー随想

木下悦二先生に学んだ事

明治大学経営学部教授
大石　芳裕氏
1981（昭和56）年卒
1983（昭和58）年博士入

私は25歳で九州大学経済学部に入学し、27歳で木下悦二先生の学部ゼミに入り、29歳で木下先生の大学院演習に入った、いわば落ちこぼれである。学部ゼミの仲間は８名と少なかったが、周りの皆は優秀で、非常に活発な議論をした。卒業後は研究者になったり、日銀やＪＡＬ、総合商社に進んだりと進路は様々であるが、それぞれがそれぞれに木下先生に学んだ事を活かしているのだと思う。大学院に入学した時、木下先生に何を研究したいかと尋ねられ「現代帝国主義」と即答したが、木下先生は「君は歳をとっているし、自分も後３年で定年である。そのテーマでは就職はなかなか難しい。国際マーケティングはどうだ？」と言われた。「マーケティングって、市場調査かなんかですか？そんなのに興味はありません」と反論したが、「いや、どうもそんなものとは違うらしい。詳しくは専門家に習うといい」と紹介されたのが、もう一人の恩師となっていただいた角松正雄先生（元熊本学園大学学長）である。

大学院は学部ゼミ以上に少数精鋭だったが、当時は先輩や他演習生の猛者が多く出入りしていて、梁山泊のような雰囲気だった。木下先生（中央）や故・徳永正二郎先生（写真・右手前）も議論に参加されるのだが、大学院生も簡単に先生方の意見に同意するわけではない。「先生、それは違うんじゃないですか」などといった言葉が普通に飛び交っていた。木下先生も頑固だが、若い研究者の卵が持論に固執し、対等に議論することを楽しんでおられた。常に

昭和57年　木下ゼミにて　左端　筆者大石氏、手前右端　故・徳永正二郎先生　手前右より　３番目中央　木下先生

真剣勝負を好まれたのだ。「自分はシューレ（学派）を作らない」と言われていたが、実際、門下生は自分の好きな分野を選んで研究を続けている。考えてみれば、それは木下先生の研究範囲が広く、門下生は結局お釈迦様の手のひらの上で踊っている悟空に過ぎないのかも知れない。いずれにせよ、学部ゼミ・大学院の授業を通して、「議論をすることの大切さ」を学ぶことができた。私も大学教員になって丸25年になるが、学生・院生には大いに議論するよう催促している。議論をすることで、自分の考えが深まり、多くの視点を得ることができ、自らの無知を知ることができる。「議論をすることの大切さ」が木下先生から学んだ第１の事である。

大学院生時代、木下先生からの年賀状にはいつも「理論的に現実を見るようにしなさい」と書かれていた。現状分析が大好きな私への戒めであったと思うが、当時はよく意味が分からなかった。「理論的に現実を見る」ということが骨身に染みて理解できていなかったからだろう。大学教員になり、他の人に教える立場になって少しずつこの言葉の意味が分かるようになってきた。いまだ「体得している」とまでは言えないが、自分の訓戒にしているし、学生・院生さらには社会人まで、この言葉を鸚鵡返しに伝えている。「二つの眼で見ていても、理論がなければ現実（の本質）は見えない」と。自分が理解するまでに時間がかかったからかどうか、これを聞いた学生や社会人の評判は良さそうだ。現実から本質に迫る帰納法と過去の文献サーベイから本質に迫る演繹法の両方が本質把握には不可欠で、本質を把握しなければ問題解決策も立てられない。この点は学問もビジネスも同様で、研究の意義はここにあると考えている。「理論的に現実を見る」。これが、木下先生から学んだ第２の事である。

木下先生から学んだ事は多々あるが、紙幅の都合で最後にしよう。第３のことは、「好奇心と向上

心」である。ある本の前書きに、木下先生は「好奇心が強い」という意味のドイツ語「neugierig」を書かれていたように記憶しているが、「研究者は好奇心が強くなければならない」ということが持論であった。真摯な研究者として生きてこられた木下先生だから、研究者に向けたメッセージであるが、実務家にも大いに適用できる名言である。ただ、「好奇心が強い」だけだと間違った方向にも行きかねないので、私は「好奇心と向上心、この二つが重要である」と学生らに伝えている。どんな時にも、いくつになっても「向上心」を失わず、自らを高める努力を惜しまないこと、それが大切である。木下先生は昨年（2008年）、『世界経済評論』９月号・10月号に「21世紀初頭における『金融資本主義』とその挫折（上・下）」という論文を発表された。その少し前にお会いした時、「数学を勉強してこなかったことが残念だ。金融工学が分からない」と嘆いておられた。今からでも数学を勉強しそうな勢いだったので、「もう、いいかげんにして」と心の中でつぶやいた記憶がある。「研究せよ」と尻を叩かれているようで、落ち着かなかったのだ。88歳にして未だ向上心を失われていない木下先生は言葉でなく、自らの生き様で「好奇心と向上心」の大切さを教えておられる。

木下先生は、「社会に出てすぐ役立つものは、すぐ役立たなくなる。一生役に立つものを若いうちに身につけておきなさい」とおっしゃったことがある。「一生役に立つもの」とは、考え方であり、行動パターンであり、生き様である。木下先生からは多くのことを学んだが、上記３点を含め、すべて考え方であり、行動パターンであり、生き様であったように思う。私も学生らにそれらを伝えることができれば望外の幸せである。

リレー随想

私の日本留学前後

崔　東術（チェ トンスル）氏
1992（平成4）年博士入
1997（平成9）年博士修了

「社会に役立ちたい」「世界を変えたい」という青年らしい夢を持って、韓国を飛び立ったのは1991年４月の春だった。私は、韓国の学生運動真っ直中の1980年度に、しかもその震源地である光州の全南大学に入学した。大学に入ってから、社会科学に関する本、中でも日本語で書かれた哲学や経済学の本を読めるようにと、サークルの先輩とともに一週間の合宿を通して朝から晩まで日本語を教えてもらった。日本との付き合いが始まったのである。一ページの中で幾度となく辞書を引くような有様であったが、合宿が終わる頃には日本語の本が読めるようになった。「本を読む」、「新しい知識に出会う」ということがいかにすばらしいものなのかが実感できた毎日であった。なかでも最初に感動を覚えたのは、「現代のヒューマニズム」（務台理作、岩波新書）という小さな文庫本だった。「世の中にこんな本があるんだ！」と感銘を受けたのを今でも覚えている。経済学では英語の本で「Political Economy」（Oscar Lange, Poland）を文字一つ一つ黄金を掘るような思いで見つめながら、感動して読んだ記憶がある。若い時は誰でも感動しやすい時期だとは思うが、そのとき本から学んだ、そして学生運動という場で感じたことはその後の私の価値観を形成するのに大きな影響を与えた。

日本語の本を読んでいるうちに、本場に行って勉強してみたいという気持ちが段々強くなってきた。当時、韓国では厳しい政治統制のなか、進歩系の本は出版されておらず、ほとんどが外国からの闇輸入か、誰かが外国から隠して持ってきたものであった。友達と一緒に日本の出版社に何回か直接手紙を出して本を送ってもらったこともあった。警察の検閲によって取られてしまったこともあったが、かなりの本を日本から買うことが出来た。しかし、それは金のかかることで、頑張ってバイトをしなければならなかった。友達は本を買うために恋人の指輪まで質屋に預けたほどである。そのうちにいまでも忘れられない感動的な出来事もあった。当時、ほぼ同じ出版社から本を送ってもらう形になっていたのであるが、私と友達は誰から教えてもらうこともなく、暗中模索で本を読んでいたので、勉強の順番が間違っていたようである。ある日、その出版社から送ってもらった本と一緒に編集長の手紙が入っていた。その手紙には、本を読む順番と勉強のやり方とが丁寧に書いてあった。その上、その「カリキュラム」には注文していない本も何冊か入っており、その本まで送ってもらったのである。もちろん、ただで。その後も、そのようなやり取りが何回か続いた。その

とき読んだ本の中で、尊敬するようになった先生が何人かできて、来日したときに最初にその先生に感謝の手紙を送った。

私は兵隊を除隊してから大学２年に復学し、それ以降は授業料や生活費のすべてをバイトをしながら賄ってきたので、留学は夢のまた夢であった。そして、ようやく1991年に、とにかく日本に行って頑張ってみようという気持ちで、最低限一年間の生活が出来る範囲のお金（50万円程度）を用意して、大きな夢を持って旅立つことができた。

日本に着いてから一年間は「研究生」という身分で日本語を習いながら、翌年の入学試験にそなえて勉強に励むことになった。その試験に合格しないと、もう滞在するお金のない私に残された道は帰国しかなかった。「背水の陣」で臨むしかなかったのである。しかし、試験日の３ヶ月ほど前には生活費がほぼ底についた。まだ日本語で話すこともほとんど出来なかった。毎日、大学の日本語講座に参加し、その時間以外はほとんど一人で試験勉強をしていたので、話すのがなかなか上達しなかったのである。試験日が間もなく迫ってきている中、バイトを探すしかなかった。言葉ができなかったこともあるが、精神的なストレスがかなりたまっていたので、その解消を兼ねて肉体労働のバイトを探した。それで見つかったのが「ビルの掃除」。

このときの経験は私にとって有益なものであった。バイトもそうであるが、３ヶ月が経つと急に日本語が聞こえるようになった。試験日が迫ってくるほど、一番心配だったのはむしろ面接の方であった。「先生の質問が聞こえなかったらどうしよう」という心配でいっぱいだった。しかし、不思議なことに３ヶ月のバイトが終わる頃には、急に日本語が、しかもお婆さんたちの博多方言が聞こえてきたのである。「言葉って、徐々にではなく、量が重なり、ある時期急に質に転換するものだなー」と感じ取った経験だった。

運よく翌年には大学院に入ることが出来、私の苦労もいよいよ本番を迎えるようになった。大学院に入ってから２年間ほどは本当につらい日々が続いたが、それが過ぎると、不思議なことに議論にも参加でき、自分の意見もちゃんと言えるようになった。７年間の博士課程は苦労の連続で、私自身を失った時期でもあった。博士号を取ること自体が目的になってしまい、「何のために来日してきたのか」という目的意識が薄れていたのである。

1997年にようやく博士号を取ったものの、現在自分の専門から少し離れて、大学時代からの趣味であった、コンピューター・プログラミングの世界で仕事をしている。「在野」からではあるが、再び様々な角度から経済学を見つめ直し、その歴史的・社会的役割を考える日々である。

リレー随想

九州大学時代の思い出
～アジアと九州大学経済学部～

県立広島大学経営情報学部教授
片桐　昭司氏
1992（平成4）年大学院博士入

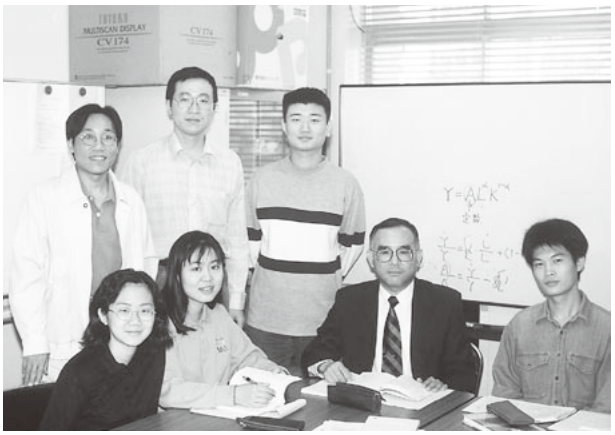
私は平成４年４月から平成11年３月まで経済学研究科の大学院生（博士課程）、助手、および留学生担当の講師として在籍しました。平成４年といいますと、バブル経済がはじけ日本経済が停滞していた頃ですが、それでも現在のサブプライムローンに端を発した世界同時不況のような先行きの見えない暗さはありませんでした。現在よりも世の中が上向くような社会的・経済的雰囲気があり、平成10年頃から徐々に景気が回復したような感が強くします。しかしながら、実際、その背後では民間企業のリストラによる企業体質の改善等が行われ、「失われた10年」を経て景気回復に繋がった訳です。

その頃の九州大学経済学部は、日本の大学のなかでは他のアジア諸国に最も近い大学のひとつであったにもかかわらず、中国や韓国をはじめとする東アジアや東南アジアの大学との間で研究や人的交流がそれほど活発に行われていなかったように思います。そのような状況のなか、平成５年の３月下旬から４月上旬にかけ、指導教官の大住先生、本年３月に退官されました細江先生、および長島先生（当時は九州大学経済学部講師、現在は埼玉大学・経済学部准教授）との４人で、タイ・バンコクにあるチュラロンコン大学の社会科学研究所を訪問しました。私は経済理論をもとにしてアジア諸国の開発経済に関する研究をしていましたので、先生方の研究・視察旅行に同行させて頂くことになりました。それまで、バンコクは何度か訪れていましたが、研究・視察という形では初めてでしたので、行きの飛行機の中で

は少々興奮していたことを覚えています。チュラロンコン大学をはじめバンコク商工会議所の訪問やバンコク銀行の役員との意見交換などを通じてタイ経済の現状を実感でき、貴重な時間を過ごすことができました。そして、現在の研究スタイルである理論と実証を基にした経済成長に関する研究を確立することができたのは、その時のタイ訪問の経験が原点だったような気がします。

大住先生の学部ゼミでは、私が九州大学を離れた後も、ゼミを兼ねた海外旅行を行っているとのことですが、平成６年秋にも大住先生および学部ゼミ生と一緒に韓国を訪れました。その頃でも、学部のゼミで海外旅行をするのはそれほど多くなかったと思います。韓国からの大学院留学生の南光鉉君の案内で、ソウルから高速道路に乗り車で約２時間のところにあるチョンジュでＬ＆Ｇの工場を見学し、ソウルでは梨花大学、延世大学、そして今では解体された日本総督府の博物館等を訪れました。初めての海外旅行という意味ではソウルは手頃な海外旅行先であり、さらに日本と異なる文化や生活習慣等を体験することができ、学部学生にとっても貴重な経験が積めたのではないかと思います。その後、経済学部の助手・講師のときには、研究のためインドネシアのバリ島等を訪問し、観光では決して訪れることのない山中の村落で撮ったスライド写真は、今でも講義の際に使用しています。

平成４年以前でも経済学部ではアジア研究や人的交流は行われていましたが、今日のように教官に限らず大学院生や学部学生が研究や観光で手軽に海外旅行を始めたのは平成６年以降ではないかと思います。海外、特にアジア諸国の大学と九州大学経済学部との研究や人的交流の活発さは、九州にある大学として、大学のアイデンティティを確立する意味で重要であると思いますし、実際、現在ではアジア諸国の大学との間でシンポジウム・国際会議や人的交流が頻繁に行われていると聞いています。今後、より一層、九州大学経済学部とアジアの大学との相互交流が進み、日本の他のどの大学よりもアジア経済研究に関して先導的な学部になって頂きたいと思っております。今後、アジアに関わる分野での先生方、大学院生、および学部学生の皆様のより一層の研究・人的交流を心から期待しております。



九州大学経済学部・講師時代：大学院の授業の際に留学生とともに
右から２人目が筆者片桐氏

同窓生健筆模様

『自動車とリサイクル』
日刊自動車新聞社、2001年刊等。

熊本大学教授（法学部）
外川　健一氏
1990(平成2)年修士入
1992(平成4)年博士入

私が九州大学大学院経済学研究科の修士課程に入学したのは、1990年の春でした。当初は矢田俊文先生（経済工学専攻　産業計画）のもとで専攻を新しく経済地理学に変更し、かねてから関心のあった資源・エネルギー問題、環境問題に関する地理学の研究を本格的に始めたいという漠然とした思いの中でスタートしました。当時の矢田先生のゼミは、立地論をベースとした経済地理学の古典の精読と、東京一極集中のベクトル著しい構造転換期における新たな地域政策の理論構築を目指して、日々精進している先輩方、同級生に囲まれ、週に１度は必ず午前10時30分から昼食をはさんで夕方まで（そして先ずは絶対と言っていいほど「休講」せずに）進むゼミに気を抜くことのできない毎日をすごしていました。

具体的なテーマの設定に関しては、当時矢田先生が研究会の座長をつとめていらっしゃった北九州市・響灘の開発構想のお手伝いをさせていただくなかで、この地域一帯にいわゆる「リサイクル産業」

を集積させ、環境産業の拠点とすべき構想が進みつつあることを知ったのが、大きな引き金となった気がします。この構想は現在では著名な「北九州エコタウン」に繋がっていくのですが、その調査の中で、様々なビジネスとしてのリサイクルの現場を訪ねていくうちに、とくに当時アジア市場にも目を向けて本格的な九州工場での操業をスタートさせていた日産自動車や、筑豊の宮田町（現：宮若市）に進出が決まったトヨタ自動車九州の動きもあって、当時はほとんど社会的関心が向けられていなかった自動車のリサイクルを中心に、研究を集中させることとしました。

この研究を始めてから８年後の1998年･秋に、『自動車産業の静脈部』という著書を、地理学出版の老舗である大明堂から刊行することが出来ました。この著作は一部の業界関係者から、初めて本格的にこのテーマを真正面から扱った研究者による著書であると紹介をされましたが、指導教官であった矢田先生からは､分析視角の甘さといわゆる研究の「深み」の足りなさを指摘され、心気一新し産業政策と環境政策の接点の考察に重点を置いてこれを執筆し直したのが、2001年９月に日刊自動車新聞社から刊行された『自動車とリサイクル』です。この再スタートには慶應義塾大学経済学部の細田衛士先生、北海道大学経済学部の吉田文和先生からの適切なアドバイスがあったことは忘れてはならないことです。

本書は、まず序章で20世紀までの日本の経済地理学における環境問題、とくに廃棄物・リサイクル研究について概観した後、当事萌芽期にあると言えた「環境経済学」における廃棄物研究を意識しながら、市場経済におけるリサイクルの位置づけについて整理しました。

続く第１章では、当時少しずつ使用されるようになった「静脈産業」概念を検討したうえで、ビジネスとしてのリサイクルの立地動向を検討しました。そして第２章では「自動車リサイクルビジネス」に集中し、その概要と政策変遷をたどりました。第３章から第６章は、これら自動車のリサイクルに向けた動向を販売段階（中古車流通）、使用段階（修理･整備段階）、廃車処理段階（解体・中古部品・素材スクラップ）、廃タイヤ処理問題の４つに焦点を当て、立地についてのみならず、産業間および地域間リンケージを意識した分析を試みました。

さらに第７章では日本以外の自動車リサイクルの現状を紹介しました。欧米諸国のそれを分析したものは、当時も少なからずありましたが、九州に拠点

を置く研究者として、韓国や台湾における現状分析を取り上げたのはその後の研究の展開に大いに役立ちました。とくに現地調査でお世話になった、延世大学名誉教授の呉　在賢先生、国立成功大学の蔡敏行先生、そして両先生からご紹介いただいた多くの現地の若手研究者との交わりは私の大きな財産の一つです。

また、第８章では島嶼部において当時問題視されていた使用済自動車の大量不適正保管の発生メカニズムとリサイクルインフラの欠如に言及し、第９章で自動車リサイクル政策のベクトルについて論じました。これは当時経済産業省を中心に議論が進んでいた「自動車リサイクル法」の制定に向けた議論を意識したものであり、その際には自動車リサイクル業者のみならず自動車メーカーの担当者や多くの行政関係者とディスカッションさせていただきました。最後の第10章では､この研究のきっかけとなった｢エコタウン事業」に改めて焦点を絞り、21世紀の環境政策を意識した地域政策のあり方について検討しました。

ありがたいことに本書は九州大学から博士（経済学）の学位論文として認めていただき、また第１回目の経済地理学会賞の受賞作ともさせていただきました。これらはすべて私を支えてくれた家族をはじめ、多くの学会・業界関係者の皆様方の協力あってのものだと改めて感じています。九大経済学部のOBからも、例えば自動車販売協会連合会の伏見剛先輩（昭和42年卒）、トヨタ自動車九州環境部の佐藤　淳先輩（昭和52年卒）等、多くの方から研究上のアドバイスをいただいていることに、ここで改めてお礼を申し上げる次第です。

その後、九大大学院比較社会文化学府で私と一緒

に学んでいた大学院生のみならず、環境経済・政策学会等で懇意となった一橋大学経済学研究科の寺西俊一先生、学位論文の副査もご担当いただいた京都大学の植田和弘先生門下の大学院生数名とともに、自動車リサイクル法施行直前の現状と課題について、竹内啓介編、寺西俊一・外川健一編著『自動車リサイクル』東洋経済新報社、2004年を刊行することもできました。

日本を初めとする先進国の自動車産業自体は、2008年末に発生した金融恐慌をきっかけに、大きな苦闘と激変が予想されますが、全世界を走る日本発の自動車は増加の一途をたどっており、グローバリゼーションの進む中で、国際的な自動車リサイクルシステムの転換がどのように進んでいくのかが、現在の大きな関心の一つです。

人物往来 ～退官

お別れのことば

細江　守紀氏
1970（昭和45）年卒
1972（昭和47）年博士入

ことし３月で経済学部を退職することになりました。振り返って見ると1981年に赴任してあっという間の28年間でした。九州大学には1964年に理学部に入学し、1968年経済学部に編入学し、大学院での５年間を含め、一時期、私学に勤務した以外は、九州大学での生活が自分の人生の大半を占めて来ました。それで、自分の生活自身も多くの範囲で九大での生活そのものとなっているところがあり、退職するにあたって、その後の研究生活をどのように再構築していこうかとあれこれまだ迷っているところです。

最近、研究室の資料の整理をしていると同窓会関係の資料が出てまいりました。そういえば、赴任してまもないころ、同窓会の新聞を経済学部で作成していた関係で、編集委員を仰せ付かっておりました。資料の中に、いつのものなのかわかりませんが、秀巧社でのサロン会の写真がありました。当時の同窓会長の大野茂様や長友泰明様はじめ懐かしい顔ぶれを久しぶりに拝見することになりました。私は1983年から米国に留学し、1985年に帰国したあとそのサロン会でお話をさせていただく機会がありました。当時はお昼の食事の合間に開かれていたと思います。

同窓会の方々とよく交流させていただいたのは1998年からの経済学研究院長の２年間です。当時の経済学部では大学院教育の充実が課題で、とくに高度職業人養成をどのようにすすめて行くかという点が重要課題となっていました。そこでビジネススクール構想が持ち上がり、当時の経営・会計の先生かたをはじめとして多くの先生がたの献身的なご協力・ご努力によってその実現を図っていった時期でした。そのおり九州電力を初めてとして地元経済界のサポートとご理解を得るために同窓会のお力添えをお願いした経緯がありました。そうしたご支援のおかげで2001年矢田研究院長のもとでＱＢＳとして開設することができました。その後、経済界の各方面からの支援もあり順調に発展しています。アジアでのビジネススクール間の大競争時代に伍していくために更なる実力を蓄えて成長していくものと思っています。

私が九州大学経済学部に編入学したころは、経済学部の教員スタッフにはいわゆる近代経済学の先生は武野秀樹教授（現在、名誉教授）お一人で、いま振り替えってみると大変不思議なことですが、マルクス経済学に関連した先生ばかりでした。私の学部のときの実感では先生方の見解は見解として承り、むしろ、大学生活を享受しながらよりよい就職先を求めるといった学生が大半であったようでした。従って、当時、学生紛争が盛んな時で、いろんな議論の場面があったのですが、先生と学生の関係でいえば、主義主張とは別次元で信頼できていた、あるいは大人の対応をしていたのではなかったかと思います。同窓会に出席し、経済学部の先生方と地元経済界の卒業生の関係が同窓生・師弟として和気藹々と交流されていることを見るにつけてそのことが実

感されるようになりました。

私が1981年に経済工学科数理経済学担当として戻ってきたときには、あらたな研究・教育領域としての経済工学を興す意図で経済工学科ができたばかりで、旧来の経済学部の画期的な改革の時期でした。このころから経済学部も大きく変わっていきました。教員の数だけにかぎっても、私が赴任した当時の30名弱の教員体制から現在では60名ほどになっています。自分の周りには共同研究できる研究者など充実した体制ができつつあります。その中で、専門分野が多様化し、社会の複雑なニーズに答えようと経済学部も懸命に取り組んでいます。

経済学部に赴任して以来、退職するまでの27年間は考えてみると私にとっては一研究者として大変恵まれた時代でした。日本、世界の経済が市場経済の拡大によって成長してきた４半世紀であり、そのことが自分や自分の周りの研究を後押ししたと言えます。しかし、米国発の金融危機により世界不況が発生した現在はあらたな時代の始まりと感じさせられます。昔の言葉、昔の言説が息を吹き返しつつあるような錯覚さえ感じます。まさに自分たちが作り上げてきた知の力が問われるときが来たと思います。今後もさらに研鑽を積む必要性を痛感しています。

最後になりますが、同窓会の皆様に置かれましてもこの大不況のおり大変ご苦労の多いこととは存じますが、一層のご奮闘をお祈り申し上げますとともに、今後とも経済学部の発展にご協力をいただければ幸いであります。長い間お世話になりました。

同窓会奨学生より

留学生活の苦楽

経済学府経済システム専攻
田　崇賢
修士一年

私は大坂ゼミに所属している田崇賢と申します。一昨年の９月末ごろ日本に来ました。もう、一年間経ちました。この一年間で私は色んなことを経験しました。そのなかには楽しいことがある一方、苦しいこともあります。しかし、それらの全ては私の人生の大きな経験となり、私の成長に役に立ちました。では、これからこの一年間で感じた苦楽を簡単にまとめます。

苦：この一年間で私にとって最も苦しかったことはやはり、経済的な困難です。私の家は中国でもごく普通な家庭で、そもそも私の留学資金を全部提供できることはまずありません。だから、自分は物価が中国より（正確には私の実家の地域より）５～６倍高い日本に留学することを決めたと同時に日本での生活は決して楽ではないことを覚悟しました。一昨年の９月27日、私はようやく日本に来ました。初めての日から、やはり日本の物価の高さに驚きました。例えば、福岡でバス代は中国のタクシー代より高いし、また、外食する時、一人分の値段は中国で４～５人分になります。私が持ってきたお金も中国でより５～６倍のスピードで減っていきました。自分は毎日不安でたまりませんでした。「学費はどうしよう、これからの生活費はどうしよう」等の心配で一杯でした。幸いに、その後アルバイトができまして自分が一定の収入を得られることで少し安心しましたが、それでも修士課程の学費に不安を抱きつつ、勉学していました。

楽：この一年間で一番嬉しかった瞬間は「経済学部同窓会奨学金」奨学生に採用されたことを知った時です。本当に自分にとってその瞬間の喜びを忘れることができません。その理由はこの奨学金のおかげで私が今までとても心配していた経済的な問題が解決に繋がったからです。前の苦で述べたようにアルバイトを始めた後、私は生活費のことは解決出来ましたが、修士２年間の学費の件についてまだ心配が残っていました。持ってきたお金は研究生の学費と修士の一年目の入学金と学費で全部なくなります。だから、２年目の学費はどうすればいいのか全くわかりませんでした。家族からの仕送りは絶対無理で、自分が更にアルバイトしたら、留学の目的は変わるし、修士論文の作成にも必ず影響を及ぼすと思いました。こういうような状態にある私を救い出したのは「経済学部同窓会奨学金」です。これで私はこれ

からの学費の問題を解決し、更に今までやってきたアルバイトも少し減らせました。それらの時間は全部勉強に使っています。自分の留学の最初の目的に戻りました。

私のこの一年間で苦楽は全部金銭的なことでした。多分、「俗だな」と言われるかもしれませんが、これは私の本音です。だから、私は心から「経済学部同窓会奨学金」を提供している九州大学経済学部同窓会のみなさまにお礼を申し上げます。そして、これからもぜひこの奨学金を提供され、私のような経済面で悩んでいる学生が安心して勉強できるようにしていただきたいです。

最後に、ありがとうございました。

日本留学の感想

経済学府経済工学専攻
戴　建中
博士1年

九州大学の学生の中で、私は特別な一人と自分では思っている。それは、自分は一般の学生より相当に年が上であるからである。実際は、私は中国で修士課程を修了し、ある重点大学に務め始めた時から、海外に行って、さらに勉強しようと思っていた。しかし、当時の情報交換手段はまだ十分に発達していなかったことや自分の努力不足等で、留学の夢を叶えることができなかった。そのまま21世紀に入って、私は初めて海外へ行く機会を得られた。学校間交流活動が盛んになったことをきっかけに、私はオランダのある研究所で研修することになった。わずか一年間の研修であったが、私は人生にとって掛け替えのない宝物を手に入れた。研修の間に、欧米の新しい教育手法及び研究理論に触れることができただけではなく、世界各国からの学生との交流によって、それぞれの国々の経済発展状況、経済政策等への理解を一層深めた。さらに、この経験によって、海外留学の夢が再び心の底から蘇ってきた。九州大学のPHDプログラムが中国で学生を募集する情報を見て、すぐに応募することを決めた。

日本への留学を選んだ理由は、日本文化への拘り及び日本が経済学分野において占める地位の高さ理解にある。私の青年時代、即ち中国改革開放の始まった20世紀80年代、日本文化は中国社会に大きな影響を与えた。特に、日本は国を開いたばかりの中国人民が先進国を知る窓口となっていた。日本の文学や映像作品は私の頭に深い印象を残した。九州大学への留学は、私が学んでいた南京大学と九州大学経済学府との密接な交流関係に大きく関わっている。私は九大に留学するその年、九州大学経済学府の代表団が私が居た学院の10周年祝賀式典に参加され、学院の教師及び学生と学術交流が行われた。このような交流を通して、私は九州大学の経済学分野における実力を知り、九州大学で勉強することができれば、きっと自分の目標を達成できると確信した。

九州大学に来てあっという間にもう半年が経った。私はだんだん福岡この町及び九州大学を好きになった。福岡はきれいで静かな町であり、勉学にもっともふさわしいまちである。自分自身は大学教員であり、海外経験もあるので、無意識のうちに九州大学を他の学校と比べることがある。この半年で、九州大学の学術研究環境をより深く理解できたし、学校側の留学生への関心の深さも実際に味わった。私のような完全に日本語がわからない学生に対して、学校側は十分な気配りをしてくれた。来日以来、チューターをつけてくれて、入居・入学等各手続きを手伝ってくれて、すぐに勉強に集中できるような環境を築いてくれた。指導教員をはじめ、各部門の先生達は私の勉強や生活を助けて下さった。

中国は高度成長期にあるとはいえ、先進国に比べるとまだ遥かに遅れているのは事実である。そのため、中国人留学生の大半は経済的問題に苦しんでいる。私が今回留学できたのは、九州大学経済学府提供の奨学金のおかげといえる。この奨学金は留学の為のすべての費用をカバーできないものの、私の経済的負担を大きく減らしてくれた。九州大学に入ってから、この奨学金は九州大学経済学部同窓会が提供したものと初めて分かった。感謝の気持ちでいっぱいである。それとともに、経済学部同窓会の母校に対する愛着の念に感激した。世界の各大学には同窓会組織が数多く存在するが、九州大学経済学部同窓会のように母校を応援している組織は決して多くはないと思われる。私は必ず九州大学経済学部同窓会の支援に応えるように、勉学に励んでいきたいと思っている。

経済学部同窓会会則

（名称）
第１条　本会は九州大学経済学部同窓会と称する。
（目的）
第２条　本会は会員相互および母校との親睦・交流ならびに九州大学経済学部の充実、発展をはかることを目的とする。
（事業）
第３条　本会は前条の目的を達成するために次の事業を行う。
⑴　講演会、懇親会の開催
⑵　卒業生名簿の発行
⑶　会報の発行
⑷　その他本会の目的を達成するために必要な事業
（本部並びに支部等）
第４条　本会は本部事務所を九州大学経済学部内（福岡市東区箱崎6－19－1）に置く。
本会は東京、関西、福岡にそれぞれ支部を設置し、これ以外の地区には、活動状況に応じてそれぞれ地区同窓会を設置する。支部ならびに地区同窓会に対しては、運営の一助として運営費を支給することができる。
（構成）
第５条　本会は次の者を以って構成する。
⑴　九州帝国大学法文学部経済科卒業生
⑵　九州大学経済学部卒業生
⑶　九州大学大学院経済学研究科・経済学府修了者および単位取得者
⑷　九州大学経済学部および大学院経済学研究科・学府在校生
⑸　九州大学経済学部・大学院経済学研究院教員および旧教官・教員
⑹　上記に準ずる者で、理事会の承認を得た者
（役員）
第６条　本会は次の役員を置く。
理事25名以内、評議員各卒業年度最低１名、監事２名、顧問若干名
２　理事のうちから会長を１人、副会長を若干名選任する。
３　役員の任期は３年とする。ただし、重任を妨げない。
４　⑴　会長は本会を代表し、会務を総理する。
⑵　副会長は会長を補佐し、会長に事故あるときは、その職務を代行する。
⑶　理事については別に規定する。
⑷　評議員は、各地区、各卒業年度の会員に対する本会運営上の窓口となるほか、必要に応じて理事会に出席し、意見を述べることができる。
⑸　監事は本会の会計を監査する。
⑹　顧問は理事会の推薦により会長がこれを委嘱する。なお､会長の要請がある場合は、顧問は理事会に出席して意見を述べることができる。
（理事ならびに理事会）
第７条　理事は、理事候補者の中から、総会において選任する。そのため、本部ならびに各支部は、それぞれ支部役員、経済学研究院教員の中から若干名の理事候補者を推薦し、本部に届け出る。理事候補者の選任は、本部及び理事会で決定する。

２　会長、副会長、理事を以って理事会を構成する。
３　理事会は、本会運営上の重要事項を審議決定し、総会に提案する。理事会の議長は会長とする。

（総会）
第８条　本会は毎年１回通常総会を開催する。通常総会の開催場所は、福岡、東京、福岡、大阪、福岡の順に、各支部総会の開催に合わせて開催することとする。ただし理事会が必要と認めたときは、臨時総会を開くことができる。
２　通常総会では次の事項を承認する。
⑴　予算および決算に関する事項
⑵　役員の選任、会則の制定および変更に関する事項
⑶　その他本会の運営に関する事項
３　総会の議事は、出席会員の過半数を以ってこれを決定する。

（運営）
第９条　本会の経費は会員の会費、寄付金、その他の収入をもってこれにあてる。会員の会費は理事会の定める会費規定ならびに会費規定細則による。

（会計年度）
第10条　本会の会計年度は毎年４月１日に始まり、翌年の３月31日に終わる。

（個人情報の保護）
第11条　本会は、会員の個人情報を取り扱うにあたり、個人情報の保護に関する法律（平成15年法律第57号）及び個人情報保護指針・ガイドラインを遵守します。
２　本会は、同窓会活動の目的の下、九州大学経済学部同窓会個人情報保護指針に従い、同窓生の個人情報を適切に取り扱うものとします。

※会費規定
１．会費は１人年額1,500円とする。
２．会費は卒業生名簿発行年度に徴収する。
３．必要に応じて臨時経費を徴収することができる。
４．会費規定は理事会の議により変更することができる。

※会費規定細則
会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（３年間分4,500円）に区分する。
終身会費は一括払いまたは３分割または６分割による分割払いのいずれかによって払い込む。普通会費は３年ごとに4,500円ずつ払い込む。但し、11回の納入を以って終身会費納入とみなす。
なお、第５条の⑷について、入学時に35,000円一括納入した者については、終身会費納入とみなす。

①終身会費	一括	45,000円
②　〃	３分割	15,000円×3回（1.5年間で納入完了）
③　〃	６分割	7,500円×6回（3年間で納入完了）
④普通会費	３年毎に	4,500円ずつ（11回～ 49,500円の納入で完了）

附　　則
本会則は、平成８年10月11日に改定され、同日より施行する。
本会則は、平成18年２月10日に改定され、同日より施行する。

九州大学経済学部同窓会役員名簿

（カッコ内は卒業年次～昭和、ただしHは平成）2009年４月

役　員　氏　名

会　長　池田　弘一(38)

副会長　深町　郁彌(29)　進谷　庸助(35)
石橋　英治(36)

事務局長　丑山　優(院・50)

監　事　貞刈　厚仁(52)　福島　泰広(61)

顧　問　本田　精一(25)　渡邉　彦士(25)
尊田　耕吉(28)　淵上　敏晴(29)
福岡　道生(30)　松浦　正純(30)
森山　靖章(30)　逢坂　充(32)
鈴木多加史(33)　荒木　千寿(35)
有吉　孝一(34)　檀　豊隆(40)

(理　事)

本　部　池田弘一会長　深町郁彌副会長
丑山優事務局長　川波洋一研究院長
久野国夫教授　深川博史教授
石田修准教授

大　学　大住圭介教授　清水一史教授

東京支部　池田弘一支部長　杉哲男副支部長
淵上敏晴顧問　吉元利行事務局長

関西支部　石橋英治支部長　佐野壬彦副支部長
小森田憲繁副支部長
中野光男事務局長

福岡支部　進谷庸助支部長　右田喜章副支部長
鬮川洋副支部長　吉井勝敏副支部長
平井彰事務局長

(評議員)

長束　正之(13)　西川　宏(21)　秀村　選三(22)
井上喜三郎(23)　福田洋之助(23)　冨田　敏郎(23)
大屋　祐雪(26)　滝口　凡夫(26)　棚倉　亨(27)
江藤　正憲(27)　井原　伸允(28)　石松　順禧(29)
兼尾　雅人(29)　深町　郁彌(29)　淵上　敏晴(29)
山下　正迪(29)　山本　和良(29)　岩本　桂(30)
富澤　義敬(30)　松尾　和彦(30)　松浦　正純(30)
村上　明夫(30)　森山　靖章(30)　大田　孝生(31)
濱口　廣海(31)　吉田　正美(31)
江口　傳(34修士)　長友　泰明(33)
真藤　乃輔(34)　下川　浩一(32)　鶴　喜久(32)
山本　兼茂(32)　鈴木多加史(33)　河原畑繁久(34)
小金丸哲夫(34)　森　重厚(34)　麻生喜久男(35)
進谷　庸助(35)　濱崎　泰行(35)　三輪　晴治(35)
石橋　英治(36)　首藤　晃良(36)　種村　茂明(36)
山道　茂樹(36)　田口　廣則(37)　佐野　壬彦(38)
渡辺　昌則(38)　黒岩　宏行(39)　犬山　俊昭(40)
檀　豊隆(40)　出口　敏明(40)　松浦　哲也(40)
沖　弘隆(41)　安陪　義宏(42)　平本　公雄(42)
右田　喜章(42)　杉　哲男(43)　寺原　義之(43)
跡部　千春(44)　一丸　孝憲(44)　甲斐　琢己(44)
鬮川　洋(45)　森　恍次郎(45)　青柳　泰教(46)
太田　光一(46)　鍛治　康博(46)　小森田憲繁(46)
宮原　博(46)　橋本　純夫(47)　吉井　勝敏(48)
岩崎　俊彦(49)　久保　隆二(49)　園田　一蔵(49)
加藤　孝典(50)　佐藤　敏弘(50)　中野　光男(50)
石田　光明(51)　古賀　英樹(51)　貞刈　厚仁(52)
工藤　重之(52)　志村　恭子(52)　岡田　裕二(53)
境　正義(53)　長竹　正隆(53)　綾部　正博(53)
吉元　利行(53)　小川　重巳(54)　小林　真幸(54)
嶋田　正明(54)　三浦　正(54)　平井　彰(55)
池上　恭子(56)　窪田　秀樹(56)　富山　幸二(56)
米村　健史(56)　楠　雅之(57)　川上　寛(58)
木村　博(58)　柴田　祐二(59)　梅原　晋(59)
齊藤久美子(62修士)　友池　精孝(59)
吉留　郁(59)　斉藤　浩志(60)　田中　和教(61)
成宮　正和(61)　桜木　良平(62)　下村　優子(62)
髙本　英一(62)　岩中　雄次(63)　大坪　勇二(63)
古川　和哉(H1)　清丸　泰司(H2)　山崎　正良(H2)
谷村　信彦(H3)　北村　英照(H3)　林　秀信(H3)
尾花　研(H4)　中村　昌子(H4)　松延　篤(H4)
森永　隆史(H4)　原山　泰之(H5)　三浦　芳徳(H5)
山崎　浩(H7)　上田　純也(H8修士)

竹下　将史(H8)　松本　康孝(H9)
久保　文一(H11修士)　濱田　貴将(H12)
今川　紗織(H14)　岩貝　和幸(H15)
甲斐　智子(H15)　香川　浄美(H16)
松元　恵美(H16)　市村　昭三(元教官)
清水　一史(現教員)

各支部の役員

東京支部……

支部長　池田　弘一(38)
副支部長　下川　浩一(32)　杉　哲男(43)
顧問　淵上　敏晴(29)　福岡　道生(30)
有吉　孝一(34)　荒木　千寿(35)
監事　森　重厚(34)　橋本　純夫(47)
理事　髙岩　淡(29)　三輪　晴治(35)
箱島　信一(37)　鍛治　康博(46)
宮原　博(46)　小林　真幸(54)
下村　優子(62)　岩中　雄次(63)
林　秀信(H3)　森永　隆史(H4)
濱田　貴将(H12)　今川　沙織(H14)
岩貝　和幸(H15)　甲斐　智子(H15)
香川　浄美(H16)　松元　恵美(H16)
事務局長　吉元　利行(53)
事務局次長　梅原　晋(59)　大坪　勇二(63)
原山　泰之(H5)

関西支部……

支部長　石橋　英治(36)
副支部長　佐野　壬彦(38)　小森田憲繁(46)
事務局長　中野　光男(50)
事務局長代理　古賀　英基(53)　権藤　健太(H4)
会計　園田　一蔵(49)
監事　鶴　喜久(32)　松浦　正純(30)
理事　棚倉　亨(27)　江藤　正憲(27)
松浦　正純(30)　濱口　廣海(31)
鶴　喜久(32)　鈴木多加史(33)
河原畑繁久(34)　石橋　英治(36)
山道　茂樹(36)　田口　廣則(37)
佐野　壬彦(38)　檀　豊隆(40)
松浦　哲也(40)　跡部　千春(44)
甲斐　琢己(44)　小森田憲繁(46)
太田　光一(46)　久保　隆二(49)
園田　一蔵(49)　佐藤　敏弘(50)
中野　光男(50)　冨山　幸三(56)
川上　寛(58)　齊藤久美子(62修士)
斉藤　浩志(60)　清丸　泰司(H2)
谷村　信彦(H3)　北村　英照(H3)
松延　篤(H4)　上田　純也(H8修士)
松本　康孝(H9)

福岡支部……

支部長　(現)進谷　庸助(35)　(新)貫　正義(43)
※6月5日開催 平成21年度総会にて選任予定
副支部長　右田　喜章(42)　鶴川　洋(45)
吉井　勝敏(48)
事務局長　平井　彰(55)
監事　森　恍次郎(45)　三浦　正(54)
評議員　(＊は運営委員)
秀村　選三(22)　大屋　祐雪(26)
井原　伸允(28)　石松　順禧(29)
深町　郁彌(29)　山下　正迪(29)
山本　和良(29)　松尾　和彦(30)
森山　靖章(30)　江口　傳(34修士)
長友　泰明(33)　真藤　乃輔(34)
麻生喜久男(35)　進谷　庸助(35)
沖　弘隆(41)　安陪　義宏(42)
平本　公雄(42)　右田　喜章(42)
貫　正義(43)　寺原　義之(43)
一丸　孝憲(44)　鶴川　洋(45)
森　恍次郎(45)　青柳　泰教(46)
吉井　勝敏(48)　岩崎　俊彦(49)
加藤　孝典(50)　石田　光明(51)
古賀　英樹(51)　貞刈　厚仁(52)
工藤　重之(52)　志村　恭子(52)
岡田　裕二(53)　境　正義(53)
長竹　正隆(53)　綾部　正博(53)
小川　重巳(54)　＊嶋田　正明(54)
＊三浦　正(54)　＊平井　彰(55)

池上　恭子(56)　窪田　秀樹(56)
米村　健史(56)　楠　雅之(57)
柴田　祐二(59)　友池　精孝(59)
吉留　郁(59)　*田中　和教(61)
成宮　正和(61)　桜木　良平(62)
*髙本　英一(62)　古川　和哉(H1)
*山崎　正良(H2)　尾花　研(H4)
中村　昌子(H4)　池田　泉(H5)
宇出　研(H5)　*三浦　芳徳(H5)
山崎　浩(H7)　*竹下　将史(H8)
手嶋　秀幸(H8)　渡辺　正司(H8)
*久保　文一(H11修士)

名古屋地区連絡先　板山　和弘(54)
広島地区連絡先　佐藤　敬(23)
白石　順一(34)
大分地区連絡先　髙山泰四郎(39)

九州大学経済学部同窓会歴代会長

初　代　田中　定氏（昭和50年10月４日～）（３期８年）
第２代　森下　弘氏（昭和58年２月４日～）（１期３年）
第３代　岡野　正實氏（昭和61年10月24日～）（２期６年）
第４代　谷川　大介氏（平成４年10月９日～）（１期１年）
第５代　渡邉　彦士氏（平成５年７月７日～）（１期３年）
第６代　福岡　道生氏（平成８年10月11日～）（１期３年）
第７代　吉田　清治氏（平成12年２月10日～）（１期２年）
第８代　森山　靖章氏（平成14年５月31日～）（１期３年）
第９代　平山　良明氏（平成17年７月７日～）（１期３年）
第10代　池田　弘一氏（平成20年７月７日～）

同窓会費納入のお願い

同窓会会費の納入をお願い致します。

会費は、終身会費（45,000円）と普通会費（３年間分4,500円）になっております。
終身会費は一括払いと分割払いとがあります。御都合のつくときにご協力よろしくお願い致します。

①終身会費	一括	45,000円
②　〃	３分割	15,000円×３回（1.5年間で納入完了）
③　〃	６分割	7,500円×６回（３年間で納入完了）
④普通会費	３年間分	4,500円ずつ（11回～49,500円の納入で完了）

◎平成18年（2006年）３月末日までに旧同窓会規定の終身会費を既に納入頂いております皆様は、そのまま新同窓会規約の終身会員に移行しております。
◎従来の普通会員として今まで振り込まれた合計金額と、49,500円との差額を、今後何回かの分割（会員様本人からの２～５回のお申し出で）、または一括払いで払い込まれた場合にも、終身会員に移行となります。
◎終身会費を分割払いにされます方は、半年毎に３回又は６回続けてお振り込み頂きますようお願い致します。
◎会費納入や住所変更等のデータは、平成21年４月30日現在で集計しました。

訂正してお詫び申し上げます。

第45号１ページ「平成20、21年度行事予定（総会のご案内）」平成21年度福岡支部総会の日時に誤りがありました。
×誤　日時　平成21年度６月２日（火）　18時～　→　○正　**日時　平成21年度６月５日（金）　18時～**
関係者の皆さまにご迷惑をおかけしました。訂正してお詫び申し上げます。